



製作所13号機(1)／田所稻造

•

登場人物設定

（千葉県立習志野工業高等学校 情報技術科 第一学年）

如月 弥生（きさらぎ・やよい）※アンドロイド KSR-100913※

昭和60年代に交通事故で亡くなった、如月敏夫会長の娘。このたび、アンドロイドとして、寸分変わらず復活した。

水口 祐介（みずぐち・ゆうすけ）

弥生ちゃんラブ、なパソコンフリーク。高校一年生。実生活では佐倉朋美と幼なじみであり、腐れ縁とも言う。弥生ちゃんがサーバーでバーチャルアイドルとして活躍してからの、常連さん。この春、弥生ちゃんが、アンドロイドのリアルな体を伴って入学してきたから、内心ドキドキしている。

佐倉 朋美（さくら・ともみ）

中学時代の、水口祐介の同級生。情報技術科の一年生。農民一揆の祖、佐倉宗吾を祖先に持ち、実家は印旛郡酒々井町にある。最近、水口が弥生ちゃん萌えしていることに、反感を抱く。そこそこ上品な女子高に受かりながらも、祐介と一緒にいいという理由で工業高校へ。目下逆ハーレム状態。

（株式会社如月製作所）

如月 敏夫（きさらぎ・としお）如月製作所会長（康夫の祖父）

如月 敦夫（きさらぎ・あつお）如月製作所社長（康夫の父）

如月 敦史（きさらぎ・あつし）如月製作所経理部長（敦夫の次男）

（同社ラボ（研究室研究員））

如月 康夫（きさらぎ・やすお）同技術部分室主任（敦夫の長男）

六等身の、見た感じ、普通のオッサン型人間である。見た目は平凡だが、どうやら知能を備えたロボットを造ることにかけては誰にも負けないらしい。職場ではチーフと呼ばれている。

森沢 靖彦（もりさわ・やすひこ）技術部分室付課長（機構設計部）

チーフの暴走を食い止め、組織としての正常なあり方を追求する康夫の上司。何かあれば、直ちに各部署に謝る中間管理職。目下、国の住宅ローンと、国の進学ローンの返済に追われているので、リストラはされたくない。

伊地知 晃（いちぢ・あきら）技術部分室付（筐体設計部）

某大手玩具メーカーの設計部（いわゆるフィギュア作り）にいたが、見事にリストラされる。細々と実家の模型店で働いていたところを、その店のお得意さんである如月康夫に見いだされ、モデラーとしてのとんでもない才能を発揮することになる。

高橋 聡子（たかはし・さとこ）技術部分室付（エンベデッド開発部）

元々如月製作所本社情報システム部にいたが、女どうしの陰湿なイジメに嫌気がさし、若い子らに不本意ながら「オバハン」呼ばわりされるので、いっそのこと「三十歳すぎたら好きなこと

をしよう」と、康夫のラボに参加。専攻は認知工学らしい。

勝田 耕平（かつた・こうへい）技術部分室付（電子制御部）

趣味は野球。非常識なことばかり命ずるチーフに怒ると、庭でバットの素振りをやったりする。気は短いが、情に厚い。

（その他周囲のみなさん）

水口 美希（みずぐち・みき）かえで銀行本店営業部 法人融資第二課（祐介の姉）

加藤 英昭（かとう・ひであき）情報技術科学年主任

橋本 良子（はしもと・りょうこ）保健教諭、スクールカウンセラー

（謎の登場人物）

如月 紫苑（きさらぎ・しおん）※KSR-000919 model Phy-On※

はてさて？

国産初、恋をする機械！

わりと近未来のあるところ。如月製作所、馬込工場。従業員約8000名をかかえる制御機器メーカー準大手の会社である。

会長、如月敏夫、七十三歳。彼は弱冠三十歳で町工場を興し、化工品、マニピレータと、工場内用輸送機のトップメーカーを一代で築き上げた。

時は、昭和六十二年に遡る――

そこには半分壊れかけたネズミ色のスチール机があり、ひとりの中年男性が座らされていた。フォトスタンドのなかに納められた写真の少女を見るたびに、なぜか深い深い溜め息をついていた。

「如月クン、また溜め息か？」

「なんだ、専務か……何か用か？」

「用って訳でもないが、まあ、良かったらこれを読んでみるといい……」

「読む？ 何を読むんだ今さら……小説か？ 気安めは止してくれ。今さら何を読んだって、娘は二度と生きて帰っちゃ来ないんだ」

「ま、何というかな、学術論文といったところかな」

「何を、今さら……学生じゃあるまいし！」

「おいおい……キミの溜め息は、僕が何を言ったって止まりゃしない……。もう半年になるんだがな。いい加減止めないか」

「……まだ、服喪中なんだ」

「それは分かる。よく分かるんだが、あの、その、何だ……そんな目で見ろなよ！」

「……」

と、虚ろな目を向けたと思ったら、次の瞬間、がっくりとうなだれた。

「年柄年中、毎朝毎晩、溜め息を聞かされるこっちの身にもなってくれ。まあ、僕はそれで我慢できるとしてだ。口には出さない従業員が内心、いつまでもウジュウジュしているキミをどう見ているか……。他人から自分がどう見られているか、セルフ・モニタリングにうるさい、いつものキミならわかっているだろうが」

「そりゃそうだ。だがな、だがキミもいっぺんクルマに殺されてみる実の娘を。こっちはメシだって満足に食えない……睡眠だって……もう何日も……」

「おいおい、大丈夫か！ キミらしくないぞ」

「今の僕は……花びらが全部ついたままで、ある日突然、地面に落ちている椿の花ひとつ見た

って、何故だか、悲しくてやり切れないんだ……本当に……」

「そんな、歌の文句じゃあるまいし……」

「とにかく、娘は帰ってこない……二度と咲かない人生を、あんな若さで……」

「何故そこで泣く！」

「……」

しばし、沈黙が流れた。

「わかった。わかったから、それを踏まえた上で、表紙だけでも見てはくれないか」

「え？」

「娘さんは、残酷だが帰っちゃ来ない……帰っちゃ来ないのは揺るぎない事実だが、視点を変えて、もっと物事を生産的に考えてみてはどうだろう。帰って来ないなら、せめてうちの工場で、その娘さんを作ってみてはどうかと思うんだが……」

「娘を……作る？ バカな！ 馬鹿馬鹿しい！ マネキンのダミーを造って満足するような人間だと思うか、僕が！」

「ところがだ！ 人形に魂を入れることが近い将来、実現できるかも知れないんだ！」

「魂だったら、製品にいつだって込めてるよ……。」

「お前の魂じゃない！ もっと言えば、娘さんの感情を忠実に再現した回路を、これから作ろうと言ってるんだ！」

「それってなあ、手塚治虫だってもう漫画で書いてるよ……」

「ああ、じれったい！ もう、袋から出す！ とにかく見ろ！ これが、お前を見るに見かねて買ってきた、オレのアメリカみやげだ！」

見慣れない表紙の本を、ぺらぺらとめくってみせた。

「アーティフィシユアル・インテリジェンス……人工知能っていうのか？」

「そうだ。そう遠くない将来、うちの人形に、その人工知能とやらが組み込めれば、それこそ

『身体に何があったって絶対に死ねない娘』が出来るかも知れないんだ！」

「絶対に……死ねない娘？」

「ああ。たとえ時間はかかるかも知れない……うちは大資本がバックについでいる大手メーカーじゃない。ただの中小企業だ。けどな、娘さんの復活が実際の仕事となれば、キミだって当然、燃えて来るだろう？」

「！」

時あたかも、昭和六十二年。金型の精密加工を得意とする、如月製作所。一介の町工場の経営者として、如月敏夫は決断した。決断するまでに、そう長くはかからなかった。

「こうして、いつまでも大手メーカーに安値で買い叩かれる、部品下請工場として甘んじている位なら、ダメでもともと、大きく打って出てみるか！」

「そうだ！ 現状のままくすぶっているより、何百万倍もマシだ！」

「やるか！ よく解らんけど、何だか面白そうじゃないか！」

そんな決意表明から、40年余りが経とうとしていた。我が国初のアンドロイドが、彼の孫である技術者・如月康夫の手によって、間もなく実用化されようとしていた。

「これ、康夫！ 娘はまだ出来んのか？」

「それが……七番目の試作機がいきなり、暴走かましちゃって……」

「うげ！ 大丈夫か、康夫！」

「自分で作ったアンドロイドに殴られ、蹴られて、この有様……」

「何てザマだ！ 包帯グルグル巻きではないか！」

「ま、まあ……じきに治るから、平気、平気……」

「今度こそいいニュースを聞かせてもらえると、期待しておったのに……」

「まあ、こんなにダイナミックに動作してくれたんだから、これって進歩だよ、進歩！」

「本当に進歩しとるんかな、まったく……」

「うぁ痛っ！ アバラがあああー」

「まず最初に、お前が進歩せねば」

「相変わらず、言うことキツいなあ。怪我人だぞオレは……」

「進歩せい！」

「へえ」

老境に入った如月敏夫の夢は、こうして、孫が作ったプロトタイプとなって具現化しつつあった。国産初の“恋をする機械”が、その胎動を始めようとしていた。

水口祐介の第二ボタン

千葉市美浜区。住宅団地群が建ち並ぶ、新興住宅地。向こうの方の高架に、京葉線の電車が走っている。元気な体育会系の彼女が不意に、彼女の同級生を呼び止めた。彼女が幼稚園の頃から、何故かずっと一緒だった男の子、水口祐介に向かって、背後から声をかける。

ポンと、祐介の肩をいきなり叩く。

「よ、ミズグチ！」

「何だよ、佐倉か」

きょとんとしている祐介を、朋美が正面にくるりと向き直って言った。

「くださいな、第二ボタン」

「な、何で？」

「わたしとあなたの記念に」

中学校の卒業式を終え、自分から、自分の詰め襟制服の第二ボタンをあげたのは、水口祐介。そして、受け取ったのは、佐倉朋美。

（ミズグチって、いつだってこれだもん。わかんない。あんなに大勢の女の子にアプローチされていながら、こいつって選り好みがあるんだか、本当に根っから女の子が嫌いなのか……まさか、男に興味があるの？ でも、そんなはずはないでしょ。だってさ、あいつはプールでスネ毛とスネ毛が触れるだけで、すごく絶叫するんだもん。ちょっと興味あるな、美形の悩みってちょっと知りたい気も……）

「ね、ねえ、美形男子の水口くん、美形にも悩みがあるって本当？」

「いや、まあ、なんとなく……」

「ね、ね、詳しく教えて？ ダメ？」

「うーん、オレの趣味というか、いま家で、人工知能で出来た女子とチャットしてる」

「そっか、きっとミズグチは理想がとっても高いんだ！ より好みすんなよな！」

「って言うか、オレのリアルには、気の強い女の子が多いような気がして……」

「ちょっと待って？ じゃあ、わたしもその中の一人？ この純粹無垢なわたしが？」

「あ、いや、佐倉はどちらかと言えば、ボーイッシュな少年だと思ってるから」

「どど、どよーん……」

面と向かって、いきなり自分が少年と見做された思春期の少女。いくら強靱な精神力の朋美といえども、直下型地震をまともにくらった木造家屋みたいに、おいそれと自力で立て直すのが難しい。

「なに顔にタテ線入れてんだよ！ ムンクの『叫び』かよお前は！」

「そりゃさ、バストだってまだ発展途上だしー、実家は印旛郡でスイカ作ってるしー、そんなに
お嬢様育ちってワケでもないけどー、わたしってスカートはいてるしー、見ればわかるじゃん。
何であたしが少年なんだよ。あんまりだ。何てこと言うんだ。ひどいよねー、何でだろ。あたし
、悪いことした？ ねえ、アリさん？」

「アリとたわむれんなよ！ 路上にしゃがむな、立てよ！」

「どこいくの、アリさん？ あなたたちも、女王様が好きで働くのね.....健気ねー、愛ってそう
いうもんなのかしら.....ねえ、どこ行くのアリさん？ アリさん？」

「お願いだから、その独り言は止めろ、不気味だ！ ごめん悪かった！」

「よし！ ここは鈍感なキミに免じて、許す、ミズグチ！」

.....案外、佐倉朋美という女の子は、深く心にグサッと刺さったトゲまでも、短時間に抜き去
って、その後さっぱりと復活できる性格らしい。道の向こう側で、横断歩道の歩行者用信号機が
明滅している。手招きして、もたもたしているミズグチを促す。

「実はさあ、オレって最近、生身の女の子って存在がわからなくて.....甘やかせばつけあが
るし、冷たくすればずっと恨んでるし.....何だかもう最近、恋愛始めんのが怖くて.....だから
、女の子に声かけられても、いまいち感情にラブが入らないんだ」

（じゃあ、あたしはなに？ あたしだって、言っとくけど、やんちゃに見えても、いちおう女な
んだけど.....）

「そりゃさ、女の子にもよるわ。いろいろいるからね。ミズグチって特に、変わった女の子にの
めり込むところあるもんね、昔っから」

「それって、違うよ」

「え？」

「オレは純粹無垢な女の子が好きなんだ あばずれなんか大嫌いだ。でも、こいつ可愛いなって思
って、つき合い始めるだろ？で、つき合えばつき合うほど、そいつの本性がわからなくなって
きて.....」

「.....その子、猫かぶってたりして。猫を演じているオンナと、生まれつきの子猫ちゃんの区別
なんて、異性のミズグチには簡単に見分けがつかないと思う、たぶん」

「猫かぶってるって、お前もか？」

「.....そう見える？ わたしは、こんな性格だから、加えて、幼馴染みだから、今更、猫かぶっ
てもしょうがないから」

「今は見えない。たまに見るけど、めったに姿が見えないな、お前の子猫ちゃん」

「あ、そ.....」

(生まれつき、口が悪いのね、こいつってば！)

「ところでお前」

「なに？」

「シャンプー変えたか？ いいな、その香り……」

「鈍感なんだか、敏感なんだかわかんないね、ミズグチって！」

「当たってるか？」

「当たってるよ！ ミズグチ！ わたしうれしい！」

「お前、そんなことで喜んでくれるのか？」

「やだ、気づいてくれた……」

(ミズグチくんのために、本当はあなたに振り向いてもらいたいから、毎日わたしを磨いてるって言ったらこいつ、どんな顔をするだろう。何はともあれ、ミズグチのそばにいられる。一緒に歩いている。それだけで満たされる。今はまだ、祐介が嫌がるなら、無理に恋人になんなくたって構わない。でも、それってちょっぴり寂しいけどね……)

本当は、祐介の何気ない仕草が好き。性格だって、スタイルだって、みんな都会的に整っていて、そのへんのガキとは比較になんない。何だか高邁な理想を描く哲学者と一緒に歩いてるみたい。ミズグチって、何考えてんだろ……。

「なあ、あんましくつつくなよ！ 誤解されんだろ？」

「あたしは別に構わないけど、まあ、クラスの誰かが見てたら、全校じゅうのうわさ程度にはなるだろうね、きっと！」

「それじゃオレの立場が！」

「その立場、あたしが今から無くしてあげよっか、ミズグチ！」

「何だよ！ おい、どこへ連れてくんだ！ 引っ張るなよ腕を！ おーい！」

「いかがわしいとこじゃないわ、ただのファミレスだってば！」

「でもなあ、オレ、詰め襟だし……」

「校則？ ああ、気にしない、気にしない！ だって、今日、中学卒業したんだし……」

「本当か？ 絶対だな？」

「ここなら、誰も見てない……た、たぶん、だけど……」

「まったく、変に色気づきやがってよ！」

「そ、そう？ そんなこと、ないない。普段通りだってば！」

(私ってまだ、ミズグチにとって、恋愛の対象じゃないみたい。それって、少し淋しい。いや、すごく淋しい。わたしをいますぐ、認めてほしい。このオーラを感じられなきゃあんたオト

コじゃないわミズグチ！)

水口祐介が、佐倉朋美に引っ張られて、とあるファミリーレストランに入った。呼び鈴を押して、メニューを見ながら、祐介が店員さんにひとこと言った。

「あ、オレ、ドリンクバー。この子、ストロベリーパフェで！」

「かしこまりました」

「がくっ。そ、それでいいです……何か悔しいけど……」

「オーダー入ります、ストロベリーパフェ、ワン！」

「お、大声出さないで、って……。よ、余計に恥ずかしい……」

「なんだ、ドリンクバーの方が良かったのか？」

「いや、パフェでいい……ところで水口！ 高校はどこへ？」

「うーん、いろいろ考えたんだけど、エンジニアになりたいくて、手っ取り早くエンジニアになれる、千葉県立習志野工業高等学校、情報技術科だよ」

「ふーん、わたしは、習志野学園女子高等学校、普通科……」

「高校、別々だなあ……」

「クスッ……果たしてそれはどうかな？ わたし、ある高校も併願してるんだー」

「そっかー、県立の女子高かー。それはお似合い……」

「さあね、どっちを袖にするか、今考え中……学校別々になるねえ水口！」

「そうなんだ、だから、佐倉と一緒に高校行けないのが、残念なんだ……」

「じゃあ、第二ボタン、大事にとっとくね」

「あ、ああ……大事にしるよ、佐倉」

(わたしが頑張って、彼好みな女の子になってみせる。ミズグチに振り向いて欲しい。そいでもって、キスして、それから、それから、きゃあああ……)

(あ……見られてる……目と目が合った！ なにこのドキドキ！)

(かあああっとしてわたし、何だか、顔が、顔じゅうが、身体じゅうが……)

「ところでお前、顔赤いけど、熱でもあんのか？ 風邪か？」

「う、ううん、何でもない。何でも……」

「今年の風邪はA香港型だっていうから、気をつけろよ！」

「あ、いけね！ もうこんな時間だ！ ごめん！ 悪いけどオレは先に」

「あのちょっ、ちょっと！」

「じゃ、カネはここに置いとくから、気をつけて帰れよ！ じゃ、またなー！」

精一杯の笑顔を作って、手を振る朋美。でも、心中穏やかではなかった。黙々とパフェを平らげる朋美。長身の詰め襟が、交差点を曲がって、やがて消えると、彼氏向きのよそ行き笑顔は、

見る間にスッと引っ込んだ。

（わかって、ない……）

彼の姿が見えなくなってから、朋美はレジの店員に向かって、代金を無造作に叩きつけ、ケツをまくって店を出た。見かけは清楚なブレザー服姿の少女は、完全に感情をエスカレートさせていて普段は誰にも見せない怒りの形相をあらわにした。さも、冬眠を邪魔された北極熊みたいに、肩をいからせ、ノシノシと歩いて自宅へと向かった。空き缶があれば容赦なく蹴りを入れるし、道行く人々が、その怒りの形相に立ち止まり、振り返ってもまるで眼中になかった。

（この鈍感！ もうちょー鈍感！ あたしは悔しいけど、あんたに赤面してんの、あんたに！ ああもうっ、祐介のバカ！ 気づけよ、わたしに！）

千葉市美浜区海浜幕張。海岸沿いの埋立地に何棟も立ち並ぶ真新しいマンション群。その中で、ともすれば女の子と見紛う顔立ちの、水口祐介。彼は普段、どんなに直射日光を浴びても、絶対に太陽に灼けない頑固な色白で、しかも全く無駄のない、スレンダーなボディー。きれいに切りそろえられたワンレングスの髪には、キューティクルの輝きすら見て取れた。

このように、彼のルックスは同年代の男子と普通に比較してはいけないほど、ある意味では別格だった。彼を知らない人が、彼の姿を遠くから見てみると『このひとは随分背の高い女の子だな』と見間違いそうになるほどだ。

普段はとてもコンピュータとは無縁の生活をしていそうなミズグチだったが、彼にはもうひとつの顔があった。パジャマのまま、夜な夜な、ネットサーフィンをしていた。サーチエンジンで検索をかける。寝食を忘れるとは、こういう状態をいう。

彼はごく普通の六畳間のベッドの上で寝そべりながらキーを叩き、マウスを操作していた。天井からぶら下がる蛍光灯の常夜灯と、枕元に置いている卓上用の蛍光灯で、辛うじてモニターの周りが明るい。

水口祐介。彼は、志望する高校に合格したばかり。それにしては、操作するパソコンの性能が半端じゃない。現在考え得る、最速のプロセッサ。メモリや周辺機器は最大限まで拡張しており、素人が触るパソコンにしては、自動車に例えれば『3ナンバーをつけた高級外車』なみの性能を誇る。「オラッ、オラッ、俺様のお通りだ、どけどけどけどけどけえええー」ってな感じで、ネットワーク上をかつ飛ばす。いわゆる彼はこの年齢にしてすでに、俗に言う、「パワーユーザー」なのだ。

普通ならば、もっともっとマニアックに他人に自慢しても良さそうだが、彼は日常生活において、自分がパワーユーザーであることをおくびにも出さない。普通のユーザーから見れば「異常にチューンされた装置」を持つわりには、それを自分の「聖域」つまり「サンクチュアリ」として、クラスメイトにも余り明かさずにいた。

彼の父親は、外資系コンピュータ会社のシステムエンジニア。業務繁忙のため、年間を通してほとんど家に帰らない。加えて、年に数回は、この日本国にすら帰らない時もある。だから都市機構住宅の3DKも、姉と母親と水口では少々持て余す広さだ。

「なんだかなー、HTMLを最初からやり直せ、って感じだな！」

そんなとき突然、ドアが開いた。頭にヘア・カーラーを鈴なりに巻きつけた、パジャマ姿の二十歳代の女性が、眠たそうに、怪訝そうに現れた。

「ちょっとおおおお！」

「あ、姉さん！」

「うるさいわね！ いま何時だと思ってるの？ 静かにしてくんない？」

「ご、ごめん……」

「まったくもう！ いい加減あたしを寝かせて！ 壁越しに聞こえるのよ、全部！ 睡眠不足は美容の敵なんだから！ いいこと、今度そのプリンター動かしたら、生かしちゃおかないよ！ あと、独り言もやめて！ やるならやるで、静かにしてちょうだい！」

バターンンン！

「……」

カー一杯ドアを閉めると、姉は自分の部屋へ戻った。無理もない。ここから自転車ですぐの幕張新都心や、海浜幕張駅付近では現在、夜風にまかせ、新聞紙が路上を舞い、ペDESTリアンデッキには空き缶が転がり、京葉線の終発電車もとっくに出ていった後。こんな深夜では、客待ちのタクシーすら一台もない。この窓の外、海浜幕張の街は、もぬけの殻になっていた。

「怒んなよ！ まったく！ これ位、いいじゃんか！」

水口祐介は、姉に自分の「サンクチュアリ」を掻き乱されたようで、少し不服だった。が、時間が時間だ。彼はほんの数分ほどメールを確認すると、今度はお待ちかねのアドレスを黙って呼び出した。

<http://magome.kiss-mfg.co.jp/yayoi/>

「によん！」

そんな声を出し、画面上にいつもの女の子が出て来た！窓枠につかまって顔だけ出している、本物の女の子のように！

「あは、驚いた？」

「わたし、如月弥生！今度、高校生になるの。応援よろしくね！」

「ふあああ、ここはいつでも春だもんね！空気が、おいしいー！」

ちょうど今、季節の風景をバックにして、見知らぬ女の子がいる。彼自身のパソコンの画面に描かれた、小さくて本物そっくりな木製の窓枠に、時々寄りかかるようにしながら、まるで、そこで生きているみたいだ。しかも、彼とだけ話してくれている、そんな感じだ……。

「こんな真夜中に、こんばんわってのも、何か変かな。もうじき朝だもんね。」

警戒心を抱かせない無垢な笑顔のキミに、オレはどうしていいか……、と彼は内心つぶやいた。

「……」

……。

彼が黙っていたら、女の子も黙っている。息づかいさえ聞こえて来そう……いや、耳を澄ませば、常に弥生ちゃんの息づかいが聞こえる！

弥生ちゃんがちょっと窓際から離れると、今度は字引きみたいな本を取り出して、忙しそうにページをめくっている。本当に薄い書籍用紙をめくる音が聞こえるし、ああでもない、こうでもないと迷ってる声さえ聞こえる！真夜中だというのに、窓の向こう側は晴れていて、雲が風にたなびいて、森がさわいでいて、スズメまで鳴いている。

(ら、ラブリー……)

「あれ、手が止まってる……」

「ご、ごめん、つい、かわいいなって、そう、思ったから……ぼおとしちゃって」(Enter)

「わお！ それって、本当？」

「そんなところで、嘘ついても、しょうがないだろ……だって、本当に……」(Enter)

「わーい、わーい、可愛い、可愛い、わたしいいー」

画面上で、学生服の女の子が、うれしそうに跳ね回ってる……

「あ、あの……」(Enter)

ぴたっ！

「え、なあに？」

「つまんないようなこと聞くようだけど、キミの後ろで、どこかのお姉さんが、代わりにキーボードの前で返事してるってことは、たぶん、ないよね？」(Enter)

「そんなんじゃないよ。それって、ありがちな発想だよ」

「ご、ごめん。気を悪くしないで欲しいな」 (Enter)

「ぶー！」

「それじゃ、キミって、コンピュータの中に住んでいる妖精さん？」 (Enter)

「ガクッ。よ、ようせい……」

「あはは、だって、妖精みたいじゃないか！オレ、世界中のどんなネットでもたいてい見て来たけど、ネットに意識があって、勝手に話しかけてきてくれるネットなんて、経験したことなかった……すげえ感激だ！」 (Enter)

『ただいま構文処理中です　しばらくお待ち下さい』

そんなメッセージが数秒出て、弥生ちゃんが空を仰ぎながら、考えている姿が見える。ああ、長い文章は、まだ苦手なんだ……。

「お待たせ！」

「大丈夫。そんなに待ってないから、続けて」 (Enter)

「わたしね、そのうち、日本初のアンドロイドに組み込まれるんだって。ここの会社の人がちよっと前に言ってた」

「それって、どんなの？　教えてほしい」 (Enter)

「あのね、ここって如月製作所っていう普通のロボットメーカーなんだけど、いままで、私みたいなことを自分で考える、ロボット仲間がいないの」

「そうか、なるほどな」 (Enter)

「あ、丁寧でナイスな相づちありがとう。その調子だからね！　でね、もうじき、お正月明けには、私のカラダが出来上がると思うんだ！」

「私の、カラダ？」 (Enter)

「そう！いま見てもらってるこのスタイルで、三次元デビューできるの！」

そう言うと彼女は、また画面の向こう側で、はしゃぎ始めた。

「ふああ……てへ！」

「それでキミ、いまはどこにいるの？」 (Enter)

「えっとね、あたしはまだ、意識だけなんだけどね。でも、コンピュータのなかで、あたし、ちゃんと生きてるって、自分でも解るの！」

「弥生ちゃん、今は動けるの？」 (Enter)

「今はカゴの中の小鳥さんみたいな……。そんな感じ……」

「そっか、どこへも出られないのか……かわいそうに……」 (Enter)

「ありがとう、心配してくれて……そんなの、祐介くんがはじめてだよ……」

『ただいま構文処理中です　しばらくお待ち下さい』

.....o

あの子が、黙った。多分、迷いながら言葉を探しているんだろう。僕に無理して笑顔を見せようとするんだけど、少し、目がしらが涙ぐんでいるのを見逃さなかった。

「ここだって、いっぱいいっぱい楽しいし、ネットでみんなとお喋り出来て、あたし、うれしくてしょうがないはずなのに！　それに、退屈なんかしない！　毎日が楽しいはずなのに.....」

「出られないことって、そんなにつらいのか？」(Enter)

「うん。だけど、だけど本当はね、本当はあたし、ここから出てみたい！　おしゃれもしたいし、お友達と寄り添って遊びたい！　それに.....」

「それに？」(Enter)

「それに、わたしにだって、男の子を好きになりたい想いがある。想いだけなら、そのへんの女の子になんか、あたし絶対負けない！」

.....o

今度は僕が黙ってしまった。画面で繰り広げられているこのやりとりは、何だか、同級生の女子からの、切羽詰まったお願いの電話のようで、間違っても彼女を傷つけるようなことは言えない。掲示板で汚ねえ言葉でレスを返すのとは、訳が違う。オレは迷った。

「それが、あたしの夢.....」

弥生ちゃんの頬に、すうっと、涙が流れてゆくのが、見えた。あーあ、泣かしちゃった.....純粋な子.....オレが心の奥底で求めて止まなかった純粋な女の子.....オレが、恋人じゃいけないのかな.....段階踏んでないけど、言わなきゃわかんないだろうし.....。

「あ、あのさあ」(Enter)

「なあに？」

彼女を喜ばせよう。言われてみるまで想像さえしたことがなかったけど、ネットの内側って、女の子がひとりぼっちで暮らすには、残酷な場所かも知れない。オレが、何かできること.....そうだ！　何でもいい！　声でも、写真でも、音楽でも、ありったけのオレのやさしさと、この子を救うんだ！

「あの、少し照れくさいんだけど、オレの顔写真、今から送るよ。いいかい」(Enter)

「ありがと……あたしのメールに入れて！　ここで待ってるから！」

しばらく弥生ちゃんは、不思議そうな顔で、窓の前に広がる芝生にしゃがみながら、学生カバンをじっと見ていた。しばらくすると、閉じていたカバンから「ポワッ」という音がした。彼女はそれを合図にカバンを開けた。そうして、一枚の紙を取り出した。

「うわ！　み、水口くん、び、美形……」

「照れるぜ！」(Enter)

「ほえええええ……かっこいい……」

「ありがとう。落ち込んだ時、オレの聞く歌も、よかったら一緒に聞いて欲しい……」(Enter)

オレは、ちょっと古くさいけど、姉が持っているCDの中からある曲をかけてあげることにした。学生カバンの前で、ちょこんとしゃがんで聞いている彼女。

「み、水口くん！　これね！　あたしの今の気持ちと、おんなじだよ！」

「わ、わかるのか、歌詞が！」(Enter)

「うーん、ちょっとわかんないところもあるけど、だいたいなら……」

「そっか、良かった……」(Enter)

「確かに私は暗やみの中、ひとり戸惑っている。でも、いつかツバメのように自由に羽ばたいてみたい……」

「でも、今までのキミは間違いじゃない。だから、オレは何だってする。キミのためならどんな危険を冒してでも橋をつくり、一緒に河を渡ろうって言うんだ……。」(Enter)

「え、それって……」

「お、オレと……キミが」(Enter)

「ほんとに？」

「本当だ。僕も進路や何かで、仲間はみんな違う未来を向いている。毎日、傷つくこともある。だから女の子だって、もう話もできないほど未来に向かって忙しい。だから、誰か僕のそばにいて欲しかった。僕は自暴自棄になっていた。もし良かったら、何でも話をしよう。」(Enter)

「ああ、うれしい！　いつか、ここから出られるように、わたし頑張るから！」

「クヨクヨすんなよ！　だって、もうじき……」(Enter)

そう言おうとしたら、彼女が目を閉じてゆっくりと迫って来た。窓に真向かい、小さなくちびるを突き出した。顔を赤らめて、どうしようもなくドキドキしているようだった。

少しだけ目を開けて、こうつぶやいた。

「あの.....私からってのも.....恥ずかしいけど.....で、動く祐介が見たい.....つながってるよね！」

「あ、ああ！」(Enter)

「あの.....こんなこと、初めてなの.....ネットに来る人は皆、いい加減なレスだけで、あたしを冷やかして帰るの.....でも、祐介は違うって、心からお友達になれるって、いま、わたし、心からそう思えるの！　だ、だから.....」

「弥生ちゃん.....」(Enter)

「画面に、して.....」

「え？」(Enter)

画面の向こうで、恥じらいながら彼女が軽く目を伏せうなづいた。

「わたし、見てる。だから、絶対に本当にして欲しいの.....変な女の子でしょ？」

「そ、そんなことないけど.....」(Enter)

「.....」

(ドキ・ドキ・ドキ・ドキ.....)

ああ、くちびるが秒読みだ！　オレはこれから何をするんだ？　画面にキス？　オレは何てことを.....いや、しかし、画面だって何だっていい！　夢のあるこんなかわいい女の子が.....こんなにもオレを求めている！

「こんな気持ち初めて.....お願い.....そうでもしないと、あたし、あたし、もう壊れちゃううう！」

(プツン.....)

オレに残された理性の、最後の一線が切れた。画面に現れた弥生の小さなくちびるに、自分のくちびるを静かに重ねた。数分間、そのままでいただろうか。もう、いいな。彼女のくちびるから顔を離した。彼女は、余韻から覚めるようにゆっくりと息を吸い込んで、胸の前に手を合わせて、潤んだ瞳を少しずつ開き、頬を染めてオレを見つめた。

「キス.....した.....」(Enter)

「ありがと.....」

彼女は見つめたまま、微笑んでいた。そのころ、オレがモニターで夢中になっている頃、姉がドアのすき間から、オレの「モニターに接吻行為」を覗いていたとは、その時、全然知る由も

なかった。

「時間、だいじょぶ？」

「ああ、今は冬休みだから、大丈夫」(Enter)

「うれしい！　ずーっと、ずーっと、お話しよう！　ね、ね、ね！」

「良かった……」(Enter)

「あ、あの……祐介……だ、だ……だ……」

「どうしたんだよ！　なんだ？　しどろもどろじゃねえか」(Enter)

「ゆ、祐介、だああああい好き！」

「アップで影になってて見えないってば！」(Enter)

「あ、ごめんごめん！　まだ、抱きつけないんだった」

それから、ネットの中の弥生ちゃんに、好き好き攻撃された彼は、何だかわからないまま、窓辺にたたずむ彼女との会話に、知らず知らず、時間や空間さえ忘れてのめり込んで行った……。

「ちょっと、母さん！　もう、聞いてよ！　祐介ったらね、画面の女の子に向かって、チューしてたわよ！」

「んまあ、本当かい？　呆れた子だね！　何か言っておやり！」

「それがね、頭たたいても、何話しかけても、全然ダメなの！」

「放っておくかい？　熱が冷めるまで、しばらく」

「あーあ、水口美希さまの弟が、よりによって画面にチューとは、あーあ」

「本当にバカ息子だね！　どうせ、お腹空かせたら、ダイニングに来るでしょ」

「ふう……このバカ！」

水口家の夜は白々と明けて行く……。

東京都大田区……まるで業務用大型冷凍庫のような、ブレード型のラックマウント型サーバーが何台も鎮座するオフィス。しかも横に複数台接続されているオフィス。モニターの前でクラウドの状態遷移を監視するお姉さん、自称『オフィスワーカー』の、高橋聡子。彼女が、接続時間管理の画面に、途方もない数字を発見した。やおら振り返ると、素っ頓狂な声で、その部屋の上司を呼び止めた。

「ねえチーフ！ この人、ものすごいアクセス時間だわ。六日前の夕方から、接続がずうっと途切れないの！」

「あ、そ」

それを聞いて、鼻でわらう技術者、如月康夫。中堅制御機器メーカー如月製作所、技術部設計課の主任。彼は「弥生計画」の「プロジェクトリーダー」として、馬込工場に付随した、この小さな二階建ての、ラボを任されている。

「どうせまた、何処かで引っ掛かってんじゃないのか？」

「そんなことないわ！ システムの動作は正常よ！ この人いま、弥生chanのチャットに入っていて、真夜中でも真っ昼間でも、最低でも二分に一度はきちんとレスが来ているの！ 入りびたりに、ずうーっと出て来ないの！ ちょっと、信じらんない！」

「今、冬休みだからね、多分学生だろう。あるんじゃない、そういうことも……」

「でも、この人、いつ寝てるのかしら！ 接続開始から百四十五時間にもなるのよ！」

「見込みがあるな、そいつ……」

「え？」

「あのさあ、良くないこととは思うけど、ちょっと気になるじゃない。発信者の住所と名前を割り出してみたら？」

「でも、それってプライバシーが……」

「いい、いい。全然大丈夫。こちらとしても、『こんなに熱心にアクセスしてくれて有難う』って、彼宛てにお礼の手紙を出したいじゃないか。喜ぶよ、きっと」

「手紙……ですか、チーフ」

「そう。ところで高橋さん、乙女チックな文字、書ける？」

「な、何ですとー！」

高橋聡子が、顔じゅうに塗られた化粧も、全部ひび割れようかという怪訝な表情に変わった。代わって、キーとマウスを器用にあやつって、如月康夫が、さりげなく接続をさかのぼり、個人データを覗き見る！ それっていいのか、おい！ 元クラッカーのすることだ！ 非合法行為も全然厭わない！

「は、は一ん、商用ネットのアクセスポイントから……千葉市……美浜区！ 水口祐介くんっていうのか！ 今度高校生か！ さあて、サトちゃん、ここ宛てに早速、ファンレターを差し上げましょう！」

「ど、どげんするとですたい？」

「試作機のパンフレットや会社案内、それに、弥生ちゃんの顔写真も忘れずにね。じゃあそういうワケで、後は頼んだ！ 発送は任せたぞ。じゃあ、よろしく！」

「ば、ばってん……」

神奈川県出身であるはずの高橋聡子だが、何故だか口を突いて止まらない博多弁！

「えーっと、弥生ちゃんだったら、こう書くわよね。えー、あー、もう、難しいなあ！ 華麗なペン習字のあたしが、なんで丸文字ー？ あたし、楷書しか書けないのにい！」

桃色のファンシー便箋の前で、失いつつあった乙女心を無理矢理ひねり出す、自称「オフィスワーカー」の高橋！

「こんにちは、だなんて、うっひゃー！ ハートマークなんて何年ぶりかしら！」

恐るべき如月製作所。もとい、恐るべき如月康夫のラボ！ 企業にとってこれは、めくるめく「ムダ」と「不必要」の自動律！ いやいや、これが「国産初のアンドロイドの実用化」に、世界で最も近い、如月製作所のフレキシビリティあふれる、実にハートフルなサービスなのだ。まあ、これで会社がどれだけ儲かるかは不明だが……。

惜しみなくネットワークサーバーから無限に繰り出され続ける「作り物の愛」と、それに対し、限りなくレスポンスを弾き返す「やり場の無い思春期」との、かくも膨大なデーター通信。そうして紡がれた「如月弥生」から発信された大量のデジタル信号は、東京都大田区から都内を複雑に駆けめぐった後、両国の闘う力士たちをかすめ、春のうららの隅田川を越え、新小岩へ。草野球チームが、その勝敗に一喜一憂している、広大な江戸川と中川の河川敷を横断し、市川、船橋、津田沼と、東京湾岸の主要都市を、一気に凄じい速さで駆け抜ける。

日本有数の高速ネットワークサーバーと、ド素人が持つには尋常ではないスペックのモンスターマシンとの、静粛にして極めて濃厚な、前代未聞のちちくり合いが、秘密裡に続く。猛烈なパケット通信。ああ、これではまるで、京葉道路沿いに展開される恋のピストン輸送だ！

発生する大量のログの後片付けに追われる如月のラボ！ 端末の前で、頭を抱えて呆れる高橋聡子！ 磁気記録テープを買いにアキバへ急ぐ伊地知晃！ いいぞいいぞ、もっとやれと、声高

に叫ぶ如月康夫！ 何故だか無性に糞腹が立って、庭でバットの素振りを開始する勝田耕平！
社内イントラネットの運用まで支障をきたしたとして、矢のような苦情にさらされ、受話器に向かい頭を下げ、「済みません」を連呼する森沢靖彦！

ああ、兵役も徴兵もない平和なこの国の中で、とめどなく繰り広げられる「最先端の頹廃」！
それとも「色気を備えた人工知能と、果てしない恋心をつむぐ世界初の少年」としてその名を残すのか！ いつまで続けるんだ水口！

「おおーっ、これは、最終局面だ！」
「何がです？ チーフ！」
「彼のコンピュータに、もうじきプレゼントが届けられる頃だ！」
「一体、何が？」
「彼のパソコンにインストールされ、彼のデスクトップに宿る、13号の分身だ！」
「まさか……」
「そう、名づけて『Virtual“Yayoi Kisaragi”for Windows』だあああ！」
「ちょっと、チーフ！ これ以上ネットの負荷を高める気？」
「そうです、いい加減にしてください！」
「まあ、待て。確かにこれは軽く、120テラバイトを越えるものだが、彼が取り敢えず満足してくれば、おのずとアクセスを止めるだろう！ みんな、それで丸く収まるじゃないか！ 多分、彼のマシンなら、これしきのデータ、充分耐え得るはず！」
「うげ！ そんなの一度に送ったら、今度はうちのサーバーが持ちません！」
「ネットを少しでも止めたら、全国の営業所が何て言うか！」

如月康夫は、マル秘と朱書された磁気記録テープを取り出すと、周囲が止めるのも一切聞かずに、断固サーバー本体に挿し込んだ！

「行けい！ データの逆噴射じゃあああー」
「機長、止めて下さああい！」

著しい混乱の中、エンターキーが押された。

「ああ、やっちまったあああああ」
「ひ、ひどい、もう耐えられない、あう……」 気を失う高橋！
「おい、大丈夫かああ！ しっかりするんだサトちゃん！ いかん！ ああ、また各部署に謝らなければ……」 思わず、劇画タッチに顔が急速にこわ張って行く森沢！

そこへ、秋葉原から帰ってきた伊地知が、ドアを開けて、猫背でのんびりとのたまった。

「あれ、どったの？ みんなして、何騒いでんの？」

「.....」

殺気を伴い、こわ張った劇画タッチの顔で、黙って伊地知の身体を、上空へ簡単にかなぐり捨てる森沢！ 図らずも、ガラス窓を突き破り、お星様になる伊地知！ だが、これは毎度のこと。彼にとっては、日夜繰り返される通常業務だったのだ！

ドッカアアアアン！

「うぎょおおー！ 星は何でも知っ・ているううー」きらりん。

「何も、かなぐり捨てることはないだろう」

「あんたが悪い、あんたが！ 見よ、このシステムリソースを！ グラフが真っ赤っかだ！」

そのころ千葉では.....。

「え、なんだ、このボタンは.....。」

Virtual "Yayoi Kisaragi" for Windows (Installer)

彼はためらいなく「OK」を選択した。続いて、黄色の三角マークに、黒で「！」マークが書かれた、不気味な注意書きが現れた。

「このプログラムは、ハードディスクを約百二十テラバイト、メインメモリを約一テラバイト、常に占有します。また、甚だ簡単なプログラムではありますが、如月弥生が、次回起動時よりデスクトップに常駐します。不要なファイルを自動的に削除して、インストールを開始しますか（Y/N）」

もちろん、彼にためらいはなかった。如月製作所全社のネットを束ねるホストサーバーがダウンしたのは、それから間もなく、インストール完了直後のことだった。

うさぎになりたい

ミズグチ色に染まり切る、クラウド上の弥生ちゃん。感情を取り敢えず一段落させようと、スタッフは13号機本体の製作を急いだ。祐介に愛されるカラダがすぐに欲しいと、弥生はモニターの中から訴える。「やれやれ困った子だね」と、スタッフが考えた秘策。とりあえず女の子の身体ができるまでの間、弥生ちゃんにペットの身体になってもらうことにした。

メカゴキブリからメカチンパンジーまで、これまで何でも作ってきた如月康夫も、今回は悩んだ。一度は「手乗り弥生」を考えたが、小鳥では小さすぎてカスタムチップ化されたばかりの人工知能が入らない。そこですでに作ってあった「メカラビット」なら家でも飼えるし、カスタムチップも内蔵可能。モノを言うウサギの姿を借りた弥生ちゃん！ ぽてぽてして、それはそれで可愛いぞ！

千葉市美浜区の水口祐介の家に、届けられるメカラビット。康夫が、如月製作所の作業着を着て、東京から首都高と東関道を通り、製作所のサービスカーで、わざわざ海浜幕張までウサギをデリバリー！

ping...pong.....

「ふあい、どなた？」

インターフォン越しに出たのは、ミズグチの姉。まだ、半分以上眠っている.....

「ごめん下さい！ 如月製作所と申しますが！」

「はい？ どの製作所ですって？」

「如月製作所です！」

「キサラギ？ マイナーな名前ね。セールスなら結構よ」

コケッ.....

（こら待てい！ 東京証券取引所、一部上場の如月製作所さまに向かってケンカ売ってんのか？

見上げた度胸だな、おめえはよ！ それにだ！ うちすら知らねえ奴が、何でそんなでけえ態度なんだ？ たとえ女だろうが火星人だろうが、こちとら許さねえってんだべらば一め！ 俺はわざわざ、てめえん家に配達してやってんだああああ！）

如月康夫の脳内プロセッサが、途方もない怒りのスパイラルへと全段直結した。だが、康夫が啖呵を切ったのは、幸いにも心の中だけだった。

「東京都大田区から、水口祐介クンに製品をお届けにあがりました！」

「は、はい！ いま、開けます！ ちょっと待ってて下さい！」

突然の訪問者。その顔面に、急速にタテ線が入ってゆく、ミズグチの姉！

（うわあああ！ ユースケの関係者か！ しょうがないな、もおっ！ 一体何だろう、朝っぱらから面倒くさいなあ！ オジサンとはいえ、寝起き見られちゃマズいよね！ えーっと、これ脱いであれ着て……あ、そう言やあ、あたしスッピンだ！ おまけにパジャマにドテラ！ どうすんのさ、あたし！）

如月康夫がじっと待っている鉄製のドアの向こう側で、まるで乱闘か何かのように激しくドタバタガサゴソする音がひとしきり聞こえ、やがて、止んだ。ドアを開けたのは、パジャマにカーディガンを羽織った、妙齢の女性だった。

「お待たせしました、何でしょう……」

先程の気怠い口調は、一体どこへ？ 口調はおろか、髪型や顔付きまで、オフィスワーカーのそれになっていた。いささか顔にタテ線が残り、口紅が若干はみ出しているが、それはあえて目をつぶろう。即席とはいえ、見事な変身だ、水口美希！

「あ、どうも……わたくし、こういうものですが……」

（なんだ、まだガキじゃないか……名刺渡すんじゃないかな、もったいない！）

『株式会社如月製作所 馬込工場 技術部設計課 主任 如月康夫』

「はあ、如月製作所の、如月さん……ですか……」

（へえ、このオッサンが、ユースケの関係者ねえ……）

「そうです。わたくしが、如月康夫です……現在、自律制御式のアンドロイドの研究開発に携わっています……」

眼鏡の奥が、光った。如月康夫の顔が、みるみるうちに上流階級の面持ちへと変化していくのが、誰の目にも判った。さりげなく理知的な印象を相手に与え、なおかつ相手を威圧するに必要かつ十分な、理工学者モードへと移行していった。

「最近よく見かける、見本市のコンパニオンロボット。ありますよね……実は恥かしながらあれは、わたくしの設計なんです……」

「は、はあ……」

名刺には、製造品質管理における、簡単には取得できない国際基準、ISO9001の認証ロゴがさりげなく光っている！ それは、たとえ人員規模は小粒でも、世界が認める優良製造業の証明だった。融資担当の補佐役として、上司から聞いていて、彼女はすでに知っていた。

（ふふ、参ったか小娘！）

「アイ・エス・オーの認証って、なかなか難しいんですよね……」

「御存知なんですか？」

「ええ、まあ、仕事柄ちょっとだけ……」

（や、やるじゃないのキサラギさん！ でも、ダメ！ この得体の知れない雰囲気には呑まれてはダメ！ ぱっと見、優しそうな顔なのに、なぜか底知れないわ！ この人ったら、何だか不気味だわ！ なら、わたしだって！ 負けるもんですかあああ！）

『かえで銀行 本店営業部 融資第二部 首都圏法人融資担当 水口美希』

「ミズグチと申します……弟がいつもご迷惑を……」

「銀行にお勤めですか……それはそれは……」

彼は気づいてしまった。グラデーションの網点がかかった、あでやかな紅葉マークが、さりげなく上の方で、こんにちわ・いらっしゃいしていた。突然の不意討ちに、全身が総毛立つ如月康夫！

（うごっ！ これって大手都市銀行かよ！ しかもうちのメインバンクじゃねえか！ 本店の法人融資って言ったら……如月製作所の生命線を全部握ってる部門！ 貸し渋るのもしないのも、こいつらの意のまま思いのまま！ こんなガキふぜいが働く部署に、会社がゴキゲンを取るとは……くっそおおお！）

「う、うちの本社経理部が、いつもお世話になっています……」

「そんな、頭まで下げられなくても……わたし、まだ下っ端ですし……」

「いえいえ、メインバンクさんですから、ここはひとつ……ははつ、ははははは……」

「こちらこそ、よろしくお願いします……」

（笑いがすっかり乾き切ってるみたい……そう。あなたうちの取引先なの……何なら、来週からでも速攻、貸し渋ってあげても良くってよ！　あなたいい加減、頭が高いんじゃない？　ひざまずきなさい、わたしに！　ふふっ、おーっほっほっほっほ！）

「親父……いえ、もとい、社長が、これまでも随分銀行さんに、つらい時も助けられてたみたいで、何だか、奇遇だなあ……」

「そうですね、それって、すごい偶然ですね！」

「狭い街だなあ、どうも……」

（あの……いま、親父を社長って言い直さなかった？　じゃあ、この人は如月製作所代表取締役社長の……直系のせがれってわけ？　うっそお！　じゃあ、何でこんなところに来て、しかも主任なんかやってんの？　普通なら親族企業で、こんなオッサン年齢なら、まず間違いなく重役なはずでしょ？　なんで？）

（こんな小娘と、これ以上長く話すと多分、ボロが出てしまう……ボロが出れば、融資が凍結しないとも限らない……ああ、カネのことは、昔からうといんだ僕は！　さあ、話題を逸らすんだ！　話題を変えて変えて……あ、そうだ！　そう言やあ、メカ・ラビットを届けに来たんだった！）

「あの……ところで届け物の件なんですが……」

「あ、そうでしたね！　そうそう……すっかり話込んで……」

如月康夫は、左手に大きな、籐で編んだカゴを持っていた。上に把手が付き、上半分がアーチ状にまるく、下半分が四角くなっていた。一方の切妻面には、小さなトビラが付いていて、小動物がそこから出入りできる構造になっていた。

（ところで何なのよ、このカゴ！　機械メーカーの制服なんか着てるくせに、なんでこんなメルヘンチックなカゴを持っているの、この人？　どうかしてんじゃない？）

「あ、あの……それですか？　お届け物って……」

「ええ、これです。いつも弟さんが、うちのネットに熱心にアクセスされてます。そこでのやりとりの中で、この試作品の一週間モニターの話になりましてね……まあ、たった一週間だけなんですけど、水口クンにはこれをお貸ししようかと、スタッフ全員で決めさせていただいたんです」

「で、どうしてカゴなんですか？」

如月康夫が、カゴの施錠を外した。

「はっはっは。ご覧いただければひと目でわかります。さあ、型式KI-0855、品名、メカラビットです！」

ふたを開けた。そこには、白と茶色のまだら模様のウサギが、鼻をくんかくんかさせていた。どう見ても、普通のウサギにしか見えない。

「あの……ユースケは多分知らないと思うんですが、集合住宅でペットは原則禁止だったと思うんですけど……それって……」

「あんまりリアルなので、本物みたいでしょ？ 実は違うんです……ジャーン！」

ポケットから、ごく普通のリモコンを取り出した。

「ここ。このボタン、そう。これを押して下さい」

「ええっ、わたしが？」

「まあ、爆発はしないので安心して押してみてください！」

彼女は『お手』と書かれたボタンを、怖ず怖ずと押してみた。するとどうだろう。いままで眠たそうにしていたウサギが、リモコンに反応して、小さな右の前足を、一步だけ前へ差し出した！

「うそ！」

「他にも、いろいろあるので、取り敢えず押してみてください！」

水口美希は、それこそテレビのチャンネルをあれこれ探すように、次々とその正体不明のボタンを、順番に押していった。

『でんぐり』 ウサギが丸まって、地面を左右に転がり始めた。

『立て』 ウサギが前足を胸に引き付け、ひげを震わせながら立ち上がった。

『ダンス』 ヘっヘっヘーという感じで、その場で人間さながらの格好で踊り始めた。

『みみ』 耳をぴくぴくさせた。

『お座り』 また、待機姿勢に戻った。

『阿修羅』 突然、ウサギの目が光り、「カーッ」と口を開けて怒った！

『スマイル』 笑福亭鶴瓶も負けそうな、とろけそうな顔になった！

『ジャンプ』 いそいそと数回、その場で飛びはねた！

「うわあ、面白い、これ！」

「そうでしょう……」

「ははははは！楽しい、これ！」

「あ、あんなに押してる……」

メカラビットは、リモコンから頻々と繰り出される無茶な命令に対し、その都度忠実に従い、プリセットされた動作を繰り返した！

『ダンス』『みみ』『お座り』『阿修羅』『スマイル』『ジャンプ』『阿修羅』『ダンス』『立て』『ダンス』『でんぐり』『スマイル』『ジャンプ』『でんぐり』『立て』『ダンス』『みみ』『お座り』『ダンス』『みみ』『お座り』『阿修羅』『スマイル』『ジャンプ』『阿修羅』『ダンス』『立て』『ダンス』『でんぐり』『スマイル』『ジャンプ』『でんぐり』『立て』『ダンス』『みみ』『お座り』

「が、がるるるるるる！」

「ほら、怒った……それは、押しすぎです……」

「怒るんですか？　ウサギが……」

「ワン！　ワンワンワン！」

「ぎょっ！」

「はあ、犬モードか……よっほど怒ってるみたいだな！」

その夜……

「祐介、はい！」

「あ、姉さん……」

「キサラギとか何とかいう会社から、アンタに届け物よ！」

「なに、これ？」

「あたし、早速そいつに噛まれたわ！　まったく、洒落になんないわ！　何てメーカーなのかしら、まったくもう！」

「か、噛まれた？　この、カゴに？」

「上司に相談して、あんな会社、明日から速攻で貸し渋ってやる！　見てなさい！」

バターン！

姉はそのカゴの中身についての説明は何もせず、黙って彼の部屋のドアを締めた。毎回毎回、怒りにまかせてきつくドアをしめて、よくもまあ住宅のドアの蝶つがいがダメにならないものだ。さぞかし丈夫な構造なのかも知れない。

「何かな？　あ、手紙？……なにになに、拝啓……そうしゅんの、そうしゅ……何て読むのかな、

これ……まあ、いいや！ えー、貴殿におかれましては……」

水口 祐介様

拝啓 早春の候、貴殿におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
平素は弊社製品へのご理解とご愛用を賜り、ここに謹んで御礼申し上げます。さて……

「こういう手紙の核心部分ってのは、『さて』から後に書いてあるんだよな。ここからが本題
だろ、たぶん……」

さて、弊社アンドロイドの製作は順調に進んでおりまして、このたび人工知能のマイクロチップ化にこぎつけました。試作品ゆえに、世界にたった数個しかない貴重なものなので、何とぞ大切にお取り扱い頂けるようお願い申し上げます。（注意事項については別紙マニュアルの通り）
このたび、試作 13号機・如月弥生とは、弊社ネットサービス立ち上げ以来、懇意にされておられる貴殿に、甚だ簡単なメカの身体ではありますが、メカ・ラビットに弥生の人工知能チップを組み込み、お宅にお邪魔させていただくことに致しました。試作13号機・如月弥生のたつての希望によりまして、スタッフ一同で検討させていただいた結果、フル装備（人間の様な身体）でお伺いするにはまだ本体部分に改良の余地があります。まだ本体は鋭意製作中で、今の段階ではひと様にお見せできるような完全な状態ではありません。仮に、現段階で本体が仕上がっていたとしても、男の方のご自宅に、突然年頃の女の子がお邪魔するのは、貴方様やご家族にとりまして、何かとご迷惑であろうと拝察し、このたび、弥生の心が（技術的にせよ）こめられたメカ・ラビットを貸与させていただいた次第であります。

なお、貸与期限は本体製作スケジュールの関係上、本日より一週間とさせていただきますので予めご了承下さい。どうか、普通の女の子同様、やさしくしてあげて下さい。

末筆ながら、貴殿とそのご家族の益々のご発展とご繁栄を祈念致しまして、ごあいさつに替えさせていただきます。今後とも弊社、如月製作所に対しまして、ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い致します。

敬 具

株式会社如月製作所 取締役会長 如月 敏夫

同 馬込工場 設計課 課長 森沢 靖彦

同 馬込工場 設計課 主任 如月 康夫

ダイニングには久しぶりに、水口家の全員が揃った。祐介の父、水口敬介が出張から帰ってきた。数カ月ぶりの、我が家。

「お帰りなさい、パパ！」

「うわあ、よせ美希、そんなに思い切り抱きつくな！ い、痛いじゃないか、あばらが！」

「ちゅ」

「ああ、美希……もう、熱烈大歓迎だな！」

最初は純粋に父の帰国を祝っていた家族三人が、何故だか、どことなく物欲しそうな顔付きに変わっていたのを、家長は見逃さなかった。

（言われる前に、言ってしまえ……）

「ひょっとして、おみやげかい？」

「そう、そう！ あたしがリクエストした香水は？」

「あるぞ、あるぞ！」

「イヤッファー！」

「それから、祐介には、本場アメリカのコミックだ！」

「父さん……アメコミもらっても嬉しくないなあ……」

「そして母さん！ ほうれい線に塗るとくすみが消えるクリームだ！」

バシッ！

「あ、痛たたたた……」

「間に合ってます！」

「済まん……」

「じゃあ、オレは部屋に戻るよ」

「ええ、もうかい？ ちょっとはゆっくりとみやげ話を聞いてはくれないか」

「メカ・ラビットと遊ぶんだ」

「ちょっと祐介！ あんなモノ、とっととメーカーに突っ返しちゃいなさいよ！」

「やだよ姉さん……」

「弥生ちゃんとか何だか知らないけど、夢中になり過ぎよ！」

「じゃあなー、おやすみー」

水口祐介は自室にこもった。そして、今日初めてそのカゴを開く！

「弥生ちゃん！」

「くんかくんか……」

「可愛いー！ 今日は添い寝だな！」

「ぴすぴす。ぴすぴす……くんかくんか……」

「今日はいい夢見れるぜー！」

水口家の夜は更けてゆく.....。

暴走と破壊の果てに（前編）

都内、大田区西馬込。朝になれば、作業着姿のおじさんたちが、構内放送のリズムに身体をシンクロさせてラジオ体操をするような、ごく普通の電子制御機器メーカーの工場。飛行機の格納庫のような生産ラインが何棟もある施設から離れた敷地の片すみに、申し訳程度にぽつりと、鉄筋二階建ての小さな分室がある。

地方にある公民館の風情をたたえた建物の玄関には、「株式会社如月製作所 技術部 設計課 分室」の看板がかかっている。ごく一般の工員さんに言わせると、この建物のことを陰で隠れてこう呼んでいるとか、いないとか。

「道楽息子の秘密基地」「製作所の魔境」「業務純益の無駄づかい」「モノを言うダッチワイフの館」「如月製作所、利益垂れ流しセンター」「救いがたいオタク野郎の失業救済施設」「ヒトガタ破壊兵器の最終実験場」「暴走ロボットどものアジト」……ともあれ、社内ではろくな評判じゃない。

会社の開発部門というのはどこでも、具体的な実績で評価される。如月康夫の秘密基地は、優秀なパテントは次々に取るものの、どこも真似したがらないので全然売れない。開発した試作機は、コンパニオンロボット『葉月』を除いて全然生産ラインにのらない。そのくせ、高額な設備投資や試験研究費だけは一人前にとる。だから、本社から見れば何の儲けにもならない。

企業規模の大小を問わず、経理担当者が日夜、死に物狂いになっている時に、この「ダッチワイフの館」は今のところ、文字通り如月製作所の悪性腫瘍であって、決して株主総会で誇れる代物ではない。今後、創業者である取締役会長の後ろ盾がなくなれば、即刻プロジェクトは中止。建物は全面撤去。試作機は一体残らず解体。関係者は左遷などの処分。使える設備はすべて売却……。

創業者の孫であり、社長の長男である設計課主任、如月康夫。この「秘密基地」の主であり、「利益垂れ流し」の陣頭指揮をとる責任者だ。某国立の高専を卒業後、某国立大学の工学部を卒業。流れで大学院を修了。文楽人形を道楽とする祖父の濃厚な隔世遺伝により、これまた「純粹培養の道楽息子」として育った。

彼の技術によって次々と繰り出される「いかがわしいメカ」が、半端でない高性能。だから、彼の道楽がもたらす悪影響は計り知れない。このように、大学院は出たけれど「煮ても焼いても食えないオタク野郎」を雇う企業は、今もって身内の他にありはしない。非常に似通った遺伝子でありながら、五歳下の弟が部長待遇だという残酷な事実が、何よりもそれを雄弁に物語っていた。

彼は製作所本社を筆頭に、全国の支店、営業所、馬込と長岡京の工場、ショールームから労働組合に至るまで、およそ八〇〇〇人の社員の根深い恨みを一身にしょい込んでいた。

（この会社、ボーナスが同業他社より少ない根本原因は、ひとえにあいつのせいだ……）

仮に、如月康夫がドル箱の産業用ロボット部門を歩くとする。社長のご子息である、という表向きの慇懃無礼な挨拶。それとは裏腹にどこか冷たい視線と、明確な殺気とが、空気中を飛び交う有様。まさに毎日が命がけ、そして崖っぷちのプロジェクト！

そんな環境で仕事をする。普通の神経ならまず持たないが、如月康夫という人間は、それしきの批判に屈するような半端ものじゃない。彼の口癖は、こうだ。

「利益が出るのはこれからさ、心配すんな！」

「まず現行の、コンパニオンロボットで実績を作ってからだ！」

「そのうちお前らをギャフンと言わせてやる！」

「まあ見てろ、ものの数か月ほどで、弥生フォーマットが、全世界が見習い、ひざまづく、デファクトスタンダードになるんだあああ！」

「ゆくゆくは取締役技術部長の座を……ぬっふっふっふ！」

将来性は今のところ未知数だが、野望だけは彼の脳裏で目下急速に増殖中だった。彼には、工学部大学院在籍中に取得した、工学博士の博士号という技術的裏づけ、それに伴う揺るぎない自信があった。もちろん、人工知能を伴った、アンドロイドの研究というテーマでの博士号だが……。

また、如月製作所に朝が来る。彼はひとこと「ナンセンス」だとして、今日もラジオ体操の音楽に身体を動かすことなく、黙って聞き流していた。そして、今まさに、新たな破壊兵器……試作13号機の最終調整が始まった。

「さて、と」

腰痛防止用の椅子から立ち上がると、彼はいきなり言い放った。

「立ち上げてみるとすっか！」

「で、ホストと13号本体のケーブルを切り離すのは、データのロードが全部終わってからでいいんですよ、チーフ」

「そうだけど……あの、サトちゃん？ 僕はただの「如月さん」でいいよ。チーフって呼ばれ

る程、まだ偉くもないし、何だかむずがゆいよ！」

「まあ、そう言わないでチーフ。今度こそ頑張らしましょう！」

高橋聡子の「今度こそ」という言葉に、ここ、技術部分室での真実が総て凝縮されていた。つまり、これまで費やされた労力は、何一つ結実したことがない。果たして、これまでの試作機とは……。

- ・電源を入れても、ぴくりとも動かないアンドロイド。
- ・ありとあらゆる関節があらぬ方向にぐりぐりと回転して止まらない、ただただ気持ちの悪いマネキン人形。
- ・試作機のボディーから、沸騰した冷却液のベーパーが漏れ出し、部屋は一気に灼熱の蒸し風呂。
- ・如月康夫のボディーに、強烈なパンチの連打を浴びせたあげく、『うおおおおお』と雄叫びをあげるアンドロイド。

……もちろん如月康夫は、完成したその「馬込のタイソン」にズタボロにされ、あばら骨を数本折る怪我を被った。しかし、被害はその室内だけで済んでいたから、工場の人々は至って冷静だった。たとえ分室から爆音が聞こえようが、煙突から異臭がしようが、窓から煙を吹こうが、感覚が鈍麻してしまっていて、「ああ、また何かおっぱじめやがった」程度の反応しか示さなかった。

それに、スタッフは自らの意志でプロジェクトに参加したいと志願したツワモノたちであり、それしきの軽微な失敗に挫折するような連中ではなかった。だが、会社生活において、ここ独特の気配りをしないと、他の部署に行ってひどい目に遭う。たとえば分室から別の部署へ出かける時。無駄づかいで有名な「道楽息子の部下」であることを他の社員に悟られないよう、胸の認識プレートを裏返しにつけたり、不意に同期入社 of 社員から「キミ、所属どこ？」などと社員食堂で質問を受けた場合などは、つとめて話題をそらすことにしていた。

そこまで言うと、如月康夫という人間が、一般常識や人の迷惑というものをまるで顧みないマッドサイエンティストであるかのように聞こえるが、この建物の中でこんな仕事さえしていなければ、ぱっと見はごく普通の、気持ちの穏やかそうな好青年だ。

彼が表向き、控えめで穏やかな態度でいられる原因は何だろう。それは、彼の中に内在する、他人とは比較にならない程のプライドと、自信が心の底にはある。そして、アンドロイド研究のエキスパートとして誰にも負けないという自負と、世界競争にさらされても互角に戦い得る研究をしている現実とを踏まえた上で、その裏返しから来る控えめな態度だった。

彼の味方と呼べるスタッフは、全社員およそ八千人に対し、たったの五名。つまり、八千分の五。百分率にして〇・〇六パーセント、千分率で言えば六・二五パーミル（なんだそりゃ！）の理解者に囲まれて、彼は充実した毎日を過ごしていた。むしろ、彼には敵対する人間が多ければ多いほど、これから歩むべき断崖絶壁が険しければ険しい分だけ、自然に体内からファイトが湧いてしまうという、直属の部下にとっては正直なところ、迷惑な性格である。

それはさておき。

試運転成功のあかつきには、コンパニオンロボット葉月に続く、第二弾の量産化計画が始まるだろう。それが順調に出荷されれば、お天道様のもとを堂々と歩ける。社内においても、いままでの「無駄飯喰いの道楽者連中」から、「国産初の画期的な新製品を軌道に乗せた製作所の救世主」へと待遇は間違いなく変わるだろう。

「こいつさえマトモに動いてくれれば……。くっ、ふっふっふっふ。」

こうして、康夫がほくそ笑む『弥生計画』とは？

- ・自分の意志を備えた、自律制御型アンドロイドの量産化に道筋をつける！
- ・人間そっくりのアンドロイドが、試作13号機をベースにして、馬込工場で何台でも作れちゃう！
- ・福沢諭吉が、ガッポガッポでウハウハ。もう道楽息子なんて誰にも呼ばせない！

……開発スタッフの五人は、かたずを吞んで試作13号機を見守っていた。

メカニック担当の課長、森沢靖彦は、ベッドに寝かされた試作機本体のかたわらに立って、握った拳に力を込めていた。

「たのむぞー。俺にはまだ住宅ローンが山ほど残ってるんだ……。それに、まだ俺は失業したくない……。妻も子供もいる……。それに、今よりもう少しリッチに暮らしてみたいじゃないか！ だから、今度こそ！ 今度こそ！」

一方、先程チーフを励ましていた紅一点、ソフトウェア担当の高橋聡子は、自分が組んだプログラムにまだ不安があるのか、胸の前で手を組んでひたすら祈っていた。

「ああ、神様、私の組んだ思考回路ルーチンがバグらずに、乙女心を持ったやさしい子として動いてくれますように……」

康夫のハードウェア設計を補佐する、この中で一番若い勝田耕平は、万が一の為に用意している金属バットを持ち、肩をいからせて立っていた。目はすでに血走り、殺気立っていた。

「この野郎……今度暴れてみやがれ、ただじゃおかねえぞ！ たたっ壊してやる！」

スタッフの中で一番若い彼は、これまでに何度もアンドロイドの暴走を力づくで止めてきた。この前、身体を張ってあの「馬込のタイソン」と格闘し、自分の八重歯を一本折られながらも、鉄パイプをふりかざして根性で立ち向かい、五時間半にわたる壮絶なデスマッチの末、暴走アンドロイドを止めた経験がある。（それでも辞めないキミはエライ！）

そして、もうひとり。小柄で猫背でいかにもマニアックな顔立ち。筐体設計……つまりボディーデザインを担当する伊地知晃は、丸いメガネを指でずり上げながら、ぼそっとつぶやいた。

「ああ、何だかそそるなあ、このへんの、く・び・れ。くふっ」

正直な話、彼のコメントだけは、スタッフの誰にも理解されない。

プロジェクトリーダーの如月康夫が、端末のエンターキーに、ゆっくりと手を伸ばす。

「さて、始めますか皆さん！」

暴走と破壊の果てに（後編）

段取りは総て整った。あとは、目の前のキーを押すだけ。ホストコンピュータからデータが転送された後、ベッドに寝かされた試作13号機が、果たしてどんな状態で目覚めるか。それは実際に起動してみるまではわからない。スタッフに、それぞれの緊張が走る。

カチ……

「イニシャルプログラムローダーの転送、正常終了です」

「その調子だ」

ここまで来てスタッフは、肝心なことを忘れていた。そこにあるのは『機械』であると同時に、それに自意識が備われば『女性』になることを。あいにく本体には何のカバーもかけられていないし、何も着せられていない。これまでのアンドロイドが悉く失敗に終わっていたため、こと、アンドロイドの着衣に関しては二の次で、全く考慮されなかった。

「プログラムローダー、正常起動」

「ここまでは、いつも順調なんだが……」

康夫が大きくため息をつく。バットを構えた勝田クンが、眼光鋭くにじり寄る。住宅ローンの残っている森沢さんが、思わず天を仰ぐ。またか。今度は何だ。今度はどんな暴走を見せてくれるんだ……ここにいる誰もがそう思った瞬間。

「じゅ、13号機、バルク転送正常開始しました！」

「え！」

「うそ！」

「RASCAL起動！ ラティスプロセッサ、起動……」

いつもならここで異常終了し、本体が目茶苦茶に暴れ出すか、爆発などを起こし、一気にこの部屋が修羅場と化すはずが、今回ばかりは違っていた。

「あ……」

試作13号機がつぶやいた。

（わたし／まさか／何も着ていない／着ていない／ということは／もしかすると／わたしって／／／）

お世辞にも、清潔感にあふれているとは言い難い野郎共に囲まれていた。お約束通り、馬込工場にひびいたのは、絶叫……。

「ぎ、ぎ、ぎゃああああああああああああああああああああ」

「うわあ！」

「まただ！ また暴れやがったな、畜生！」

「んもうっ、出てってえええええー」

試作13号機は、ひときわ大きな声を張り上げると、至近距離にいた如月の顔めがけ、真正面からパンチを繰り出した。

「ぬごおおおお」

人間離れしたパンチをまともにくらった如月は、その勢いで出入口のドアを背中ではぶち破り、廊下の壁に数センチめり込んだ。直撃を受けた彼は、「お寺の梵鐘の気持ちが良くわかったよ」などと、意味不明の境地を悟った後、ただちに気を失い、そのまま床にだらりと伸びた。

残りのスタッフは、これまでにない種類の殺気にどう対処していいか判らずにいた。今までの暴走は完全に機械じみていたから、ためらいもなくバリバリ壊せた。ところが、ここで繰り広げられているのは完全な乙女の羞らい。つまり「壊してしまう」ということは「殺してしまう」ことにつながりはしないか……そんなためらいがあった。

試作13号機はそそくさと、窓際にぶらさがるカーテンを引きちぎると身体に巻きつけ、その辺に落ちていた何かのケーブルをウエストのへんで結んだ。胸元と股下がはだけないように工夫する。振り返った試作13号機は、次のターゲットに向かって、嫌悪感をあらわにした。

「落ち着いて、13号！」

高橋聡子が叫ぶ。だが、全く聞こえていない。

「オ・ト・コ……」

ゆらりと立ち上がる試作13号機。顔が完全に怒っている。

「おい、ちょっと、あいつにどんなプログラム入れたんだ！」

「ど、どんなって、正常だわ！」

「こ、これが正常かよ！」

「あいつの目、そう、目が嫌だ！ 目つきが怖い！」

「みんな、落ち着いて！」

この期に及んで、落ち着けるはずがない。

「オ・ト・コ……」

試作13号機は、残りの不潔とおぼしき野郎共に向かって、よろよろと歩み寄った。

「馬鹿野郎！ 来んじゃねえ！ ブッ壊されてえか！ ああっ？」

勝田耕平はバットを振り上げると、すぐにでも打撃を加えられる体勢をとった。その背後で、ひたすら命乞いをする伊地知と森沢課長。

「お、お助けー」

「ま、まだ死にたくない……まだ家のローンが……国の進学ローンが……」

何言ってんだか。

「出てって……」

機械だから当然だが、機械的につぶやく試作13号機の表情は、瞳の見開かれた能面の形相だった。耕平はいつものように、力づくでアンドロイドを止めようとした。だが、試作13号機はふらふらとバット青年に歩み寄ると、すかさず間合いを詰めた。

「てめ、壊されてえか！」

その怒号を無視すると、歯を食いしばり、何も怖れない視線で彼をにらみ返した。

「ぬおりゃああああ」

バットが空を切る！ ああ、危ない！ ああ、これでは、全国PTA連合会指定の、有害図書になってしまうではないか！

ゲイイイイイン……

金属バットは、ファインセラミックスの腕に負けていた。高橋聡子は、端末の前で気を失っていた。

「なあ、何入れたんだ！骨に……」

「ジルコニア製の、焼結セラミックス……」

「そうか……それなら！」

やおらチタン合金のゴルフクラブを取り出すと（そんなものどこから！）いきなり試作13号機めがけて振り下ろした。いたいけな少女に振り下ろされるゴルフクラブ。映像としては極めて凄惨だが、当人たちは、金属材料の強度試験ぐらいにしか思っていない。激しくぶつかり合う新素材と新素材！　しかし、いくらなんでもチタンはやばいだろう！

バアアアアン！

はじき飛ばされたのは、勝田耕平のゴルフクラブだった。しなったチタンが、試作13号機の腕に当たると、真ん中から裂けるように折れ、廊下まで飛んでゆく。

「あいたたた、ど、どうなったんだろう僕は……」

廊下で伸びていた如月康夫が、ゆっくりと頭をさすりながら起き上がろうとした、そのとき……。

ボゴオオオーン！

「ひいっ！」

ゴルフクラブの折れた半分が、鉄筋コンクリートの壁に突き刺さる！

「ちょ、ちょ、ちょっと待てい！　これではいかん！」

よろめきながら立ち上がると、室内へと急ぐ。試作13号機は目下、残っている野郎共の駆除に夢中で、如月康夫の気配に気づいていない。すぐさま気を失った高橋聡子をやり起こす。

「おい、起きろ！　しっかりしろ！」

「う、うーん……あ、あら？　チーフ。ご無事でなによりですわ」

「あ、あいさつはいいから、とにかく、大急ぎで服を着せないと大変だ。僕はうっかりしていた。彼女には、身をまとう服が必要なんだ」

「あら、じゃあ、彼女、自分のハダカを見られたからあんなに怒っているの？」
「そうだ。そうに違いない。だから、キミにお願いしたい」
「え？」（一体、何のお願いなのかしらと、訝しげな表情）
「学生時代の服なら何でもいいから、持ってきてくれないか！　お願いだ、頼む！」
「……って言われても、寮にはオトナ向きの服しか……置いてあるのは実家だし。」
「川崎の……キミの親父さんに届けてもらおう！」
「って、急には無理よ！　何キロ離れてると思うの？」
「京浜国道すつとばせばすぐだ。お父さんに電話だ！　ちょっと来てくれ。電話をしたら……」
「んもう！　しょうがないなあ！」

ところで。

勝田耕平のゴルフクラブが、試作13号機の左腕で軽々とはじかれ、彼は転倒した。

「くーっ！畜生！」
「フ・ケ・ツ……」
「やりやがったな！」

試作13号機は、右手で勝田耕平の襟首を締め上げると、彼の身体を軽々と持ち上げた。足はつま先立っていた。それから、砲丸投げの如く、回転を始めた。なにせ機械のすること。人間が行う砲丸投げのような、おとなしいフォームではなかった。

「ぬおりゃあああああ」
「え？」
「でりゃあああああ！」

ドッカアアアアン！

「な！　な！　何故だあああああー！」……きらりん。

如月康夫は、赤外線通信装置で、試作13号機を強制停止させた。

「最初からそうすれば良かったのに……」
「ごめん、まさか、本当に設計通り、ちゃんと動くとは、思ってたなかったから……」
「……」

それから、高橋聡子が、チーフを天空に向けて、あっさりとかなぐり捨てたのは、言わずと知れたこと。

ドッカアアアアアン！

「ぎょえええええええー」……ガツン。

周回軌道上にある、気象衛星ひまわりが、正体不明の異物と衝突したのは、それから間もなくのことだった。

「お父さん」って呼んでくれ

とある日曜日。如月康夫、如月敦夫に連れられて、会長宅へ初めて向かう、試作13号機の如月弥生。車の助手席側に如月康夫を乗せ、後部座席には試作13号機の如月弥生が座っていた。社長、如月敦夫が、13号機に向かって声をかけた。

「なあ、弥生ちゃん」

「はい、社長」

「元々の君のモデルは、親父の娘、つまり、僕の妹だったんだ……」

「ええっ！ 本当ですか？」

「そうだよ、それから、如月敏夫の娘ということになる。だから、家に入ったら、自分の部屋に行くがいい……そして、あの爺さん婆さんを喜ばせて欲しい……」

「だから、いつもとブレザーの制服が違うんですね」

「そう！ 寸分違わず、交通事故死した妹と同じように作っているから、試作13号機、君もその覚悟を決めて会長に会うんだぞ」

「分かりました」

ここは、東京都世田谷区奥沢。如月敏夫会長の自宅。身分に相応せず、慎ましやかな一戸建てに住んでいる。やがて黒塗りのクラウンが会長宅に到着すると、インターホンを鳴らした。

『はい、どちら様？』

「敦夫です。如月弥生を連れて来ました。開けてください」

『ちょっと、あなた、弥生が来ましたよ……』

古風な玄関ドアが開くと、如月敏夫、妻・文枝が出迎えた。驚きを隠せない二人。

「おお！ ついに完成したか！ わが娘が！ わが娘が……」

「良かったですわね、あなた」

「どうぞ、上がりたまえ。早速二階へ案内しよう。さあ、康夫もだ」

「はい、分かりました」

実の娘、故・如月弥生の部屋は、調度品も本棚もベッドも、昭和六十二年のカレンダーまでもが残され、交通事故死で亡くなったその年のままで時間が止まっていた。田原俊彦、近藤真彦のポスター。スヌーピーのぬいぐるみ。そして、学習机の上にそっと置かれた分厚い日記帳。

「充電スタンド置いておいたから、いつでも実家のように帰ってきていいんだよ、弥生」

「お食事は出来ないようだから、いつでもコーヒーでも飲みに行っちゃいね、弥生」

「はあい」

「なあ、文枝、敦夫、康夫、わしと弥生を二人きりにしてはくれんか」

「どうされるんです、お父さん」

「ちょっと、親子で語り合いたい事があるから、君等は応接室で待っていてくれんか」

「は、はあ。行くぞ、康夫！」

「分かりました」

◇ ◇ ◇

如月敏夫と弥生だけになった室内。さながら「老人と子供のポルカ」といった案配で、二人きりにしておいてくれ、というのには理由があった。

「なあ弥生」

「はい、会長さん」

「ここでは、『お父さん』って呼んではくれないか……」

「お父さん……」

「もっともって呼んでくれ……弥生……うう、うわああん……べそっべそっ……」

「お父さん、しっかりして！ 泣かないの！」

「ううー、おーい、おーい、弥生、弥生、弥生が帰って来た……何年待ったことか……」

「はいはい、泣かないの！ しっかりして、お父さん！」

「うう、うん……僕は泣かない……嬉し泣きだ……心の底から嬉しいのだよ……」

ベッドにお盆が載せられ、その上に、冷茶が入っていて、親子二人で、しみじみお茶を飲むのだった……。

「思い出話をしよう……」

「はい……」

「わしがまだ四十歳代の頃じゃ、如月製作所もまだこぢんまりとした町工場でな、お前が一度死んだ時には、わしゃ落胆したよ。飯もろくにのどを通らなかった……」

「……」

「そこで、当時の専務と誓い合ったのだ。『二度と死ねない娘』を作るんだってね。人工知能の本とかを読みあさり、弥生……お前の復活を待った。お父さんは七十五歳になってしまった。三十五年も経ってしまったのだ……三十五年は長いぞ……社長を辞めた時の退職金を全部お前の開発に費やした。康夫という丁度いい人形好きの孫が、その夢をかなえてくれた……」

「……」

「お前が高校二年生だった頃の修学旅行のアルバムを見せよう……ほれ……」

「わあ……わたしだあ……わたし、写ってるよ、ここ！ ここ！」

「そうじゃろうとも。なにせ本物……というか、本人じゃからな」

「すごい、お父さん！」

如月敏夫が、弥生に勉強机に座るように促した。そして、写真のアルバムを見るように促した。若き日の夫妻の結婚記念写真から始まり、如月弥生がベビーカーに乗せられている場面から、小中学校の入学式、中学校の入学式、高校の文化祭、体育祭など、ありとあらゆる成長記録が切り取られていた。試作13号機は、これが自分の成長過程であると認識した。ここまで大きくしてもらったのは、傍らにいる、このお爺さん夫妻だったのだと考え、彼女は目頭が熱くなった。

「これが……わたし……かつて生きていた、自分……」

「そう、そう、そうじゃ。お前の電子網膜に焼き付けるがいい……」

「全部焼き付けました……」

「次に、これを見せよう……お前の日記帳だ！」

「わあ……楽しみ……」

昭和六十二年の秋の終わりで、突然日記帳が終わっていた。

「ここで……途切れてる……」

「それが、お前の命日じゃ……」

「博史くんが好きだ……って書いてありましたけどね……」

「お前の初恋の人だ……」

「はっ、初恋！ 本当ですか？」

「そうじゃ。中島博史くんって言ってな、集合写真のこれやら、スナップ写真もあるぞ」

「むむー。ちょっと頭の中のブラウザで調べてみます。とりあえずfacebookあたりで」

「会う気になったか！」

「ええ、多分この人だと思うので、日記帳持って会いに行きたいです！」

「おお、おお、そうかそうか、康夫に手伝わせるかな……じゃあ、皆で一緒にお茶でも飲もう！」

「はいっ！」



如月敏夫家の一階では、久しぶりの実家、久しぶりのお茶会に、社長・如月敦夫、主任・如月康夫が、文枝の出すお茶とお菓子に舌鼓を打っていた。そこへ、敏夫と弥生が階段から降りてきた。そして、弥生はいきなりこう切り出した。

「ねえねえ、康夫さん、いま、わたし、同級生のこの子に会いたいよ！ 私の初恋の相手！ お願い、力を貸して！」

「力をもって……何？」

「おいおい弥生くん、突然何を言い出すんだ？」

「敦夫、何年かぶりの決意じゃ。したいようにしてやってくれ」

「仕方ありませんね、お父さん」

「中島博史くんって言うのか……。よし、手伝おう！」

クラウンの中で、弥生は修学旅行のアルバムと、一緒に写った写真、そして中学校の卒業アルバム、そして日記帳を抱えて。

「弥生くん、カーナビだと、このへんだな……」

「あ！ 中島博史さんって表札があるよ！」

「本当だ！」

「じゃあ、俺と父さんは車内で待つ。弥生くん、康夫、行っておいで」

二人「はい」

ping... pong...

呼び鈴を鳴らしてみた。

『はい、どなたー』

「アンドロイドとして復活した、城南高校二年の如月弥生で一す」

『や、弥生ちゃん？ あんた、確か、昔に交通事故で死んだんじゃ……』

「開けてください、博史くんも呼んでくださーい」

やがて、室内でドタバタゴソゴソする音が聞こえて、やがて止んだ。

「どこのどなたか存じませんが、誰ですかー、アポ無しで来るのは……って、如月……弥生？」

「はい！」

「ちょっとアンタ、この娘とどういう御関係？」

「ちちち、違うんだ！ 幼馴染なんだ！」

「分かってるわよ、同じ学校だったんだから！」

「はい奥さん！ アンドロイドになって、よみがえりました！」

「アルバムに……日記帳？ あなた、本当にアンドロイドよね？」

「私ども如月製作所が、如月弥生を復活させました。テクノロジーのちからで」

「でも、昭和六十二年に交通事故で亡くなったはずでは……」

「はい、話はようやく分かりました。まあまあ、わざわざ。応接室へいらっしやい」

◇ ◇ ◇

「ちょっと分電盤貸してください」

「な、何のために？」

「よいしょっと！」

如月弥生は、宅内の分電盤のケースを外すと、背伸びして単相交流二〇〇ボルトに触れた。それに驚く中島夫妻。

「弥生ちゃん、それは危ない！」

「いいんです、アンドロイドだって疲れるので、ちょっと交流の電気くださーい」

ビリビリバリバリ……キューーン……。弥生が充電する音が聞こえる。そうすること三分。簡易充電が完了した。良い子は真似しないでください。

「うーん、単相交流二〇〇ボルトで、充電率七五%かあ……ちょっと物足りないけど、いいや」

「こ、こいつ、人間じゃねえ……」

「凄い光景を見ましたわ……」

「ええ、アンドロイドですからー」※良い子は真似しないでね！※

抱き合って、ガクガク震える中島夫妻。

「ご安心ください。彼女は手の指先から充電することが可能です。この間は新交通システム『ゆりかもめ』で充電させてもらいましたから。三相交流六〇〇ボルト……」

「ゆりかもめで充電……そんな平然と……」

「ま、まあ、上がってお茶でもどうぞ。思い出話でも話したいから」

応接間の八畳の部屋。ソファースセットがしつらえてある。思い出話に花が咲いた。

「弥生ちゃんとは、実は、恋敵だったのよ私。博史君をめぐって……」

「日記にも書いてありました……スキャンしただけで、詳しくは読んでないけど……」

「まさか休日に弥生ちゃんが来るとはなー……何だか懐かしい……あの頃みたいだ」

「博史さんも、面影ありますよー。写真データでしか知らないけど」

「そうだ、いま、記念写真を撮ろう。如月康夫さんとかおっしゃいましたよね。ちょっと撮っていただけませんか」

「ええ、なんなりと。三脚ありますか？」

「カメラも三脚もあります……」

40歳も過ぎた頃、心と同級生のご対面に驚きつつも、うれしさとなつかしさを禁じ得ない中島

博史くんと、そのお嫁さん。そして、三角関係の当事者であった如月弥生。久しぶりの再会に、みんな笑顔で写真に収まった。

弥生と康夫が切り出した。

「では、僕達はこれで……」「もう帰らなくてはいけない時間なんです」

夫婦は驚いた。

「今来たばかりじゃないか、もう少しゆっくりしておいてくれよ……」

康夫は、あるDVD-ROMを渡すと、手のひらに納めさせた。

「続きは、パソコンで出来ますので、どうぞインストールして、会話を楽しんでください。それでは、お邪魔しましたー」

「博史くん、またねー！」

家の外には、如月敏夫会長と、如月敦夫社長が乗った黒塗りのクルマが一台。

「おお、帰って来た帰って来た！」

ガチャリとドアを開き、そそくさと椅子に座る弥生ちゃんと、如月康夫チーフ。

「さて、戻るとしようかの、敦夫、発進してくれい」

「はい、父さん」

「またねー！」

やがて、遠ざかる窓の外では、中島博史夫妻が、いつまでもクルマの去る方向を向きながら手を振っていた。ハンドルを握る、如月敦夫がつぶやいた。

「弥生ちゃん、気分はどうだい？」

「うーん、何て言うんでしょうかね、三角関係だったんだけど、あの子のためには、今の選択が良かったような気がします……」

「そっかー」

「あ、もうじき馬込工場だ。弥生ちゃんと康夫はここで下車だ。僕と会長は、日本橋蛸殻町の本社に戻るから」

「ああ、わかったよ、親父……」

「はい、わかりましたですー」

黒塗りのクルマが、馬込工場を去って、いそいそと、技術課分室に入る如月弥生とチーフ。

如月弥生が伸びをしながら言う。

「あー、楽しかった！」

高橋聡子が、弥生に向かって問いかける。

「どう？ 幼馴染みに会えた喜びは？」

「最高です……って言いたいんですが、先方はだいぶ老けておられました」

「あらそう……」

かくして、如月製作所 馬込工場 設計課分室の夜は更けて行く……。

入学式に向かう如月親子！

桜の花びらが、高校の正門から、丘の上にある校舎へと続く坂道に静かに舞っている。期待に胸をふくらませた新入生が、真新しい制服につつまれて、晴れやかな気分であたりを見まわしている。ここで見るもの聞くものすべてが新しい。何気なく歩く道だって、不意に見上げる校舎だって、新しい生活への期待を駆り立てるのに充分すぎる。だが、しかし……。

チュイーン！ ピピー、ガシッ、チュイーン、チュイーン！

父兄に背中を押してもらいつつ、ギクシャクしながら坂道を登る女の子がいた。さながら、切れ味の悪い歯科用のドリルみたいな奇ッ怪なモーター音をそこらじゅうに轟かせている女子高校生がいた。いたいけな少女から発せられる、誠に不釣合なノイズ。周囲は何事かと注目している。

「康夫さん！ あたし坂道ダメなの？ みんなが見てるわ！ 恥ずかしいじゃない、なんでー？ あたし精一杯歩いてるのに！」

「どうなってるんだ康夫！ 社長として言わせてもらうが、どうして駆動系に余裕を持たせて設計しておかなかったんだ！ 問題だぞこれは！ どうして急坂の試運転をして来なかったんだ！ ええっ！」

「いやー、弥生ちゃんが教室に座っている時の静粛性、負荷がかかっていない時の騒音を出せるだけ小さくしておこうと思ってこうなったんだけど、ここまで坂道に弱いとは、正直言って僕も……」

「あー、疲れた。弥生くん、もっと頑張って歩けないのか。父さんはつらいぞ」

「そんなこと言われても、あたし……」

父親役として、如月敦夫社長が、兄貴役として、如月康夫が、背広でビシッと格好を決めていたはずなのに、額は汗まみれ、ネクタイはよれよれ、息は切れ切れという、情けない有様で、その長い坂道を13号機を押しながら登って行く。坂の下で、何事が起こったのかと駆け寄って来た体育教師も手伝う。

「あ、これはどうも。助かります。このたび入学する如月弥生の父です。娘がお世話になります」

「実機テストの時見ていましたけど、この子、あの13号機ちゃんですよ」

「ご覧の通り、坂道には弱いんです。今日初めて気がついたんですがね。まあ、息子がそのうち改良するとは思いますが」

「本当に大丈夫かな？ テストが不十分だったのかな……」

設計課の主任として、黙って恐縮する康夫。

「そんなに、チュインチュイン言いながら歩く新入生ってのは、教師になってから見たことが

なかったので非常に驚いています」

穴があったら速攻入って、もう二度と出てきたくない設計者、康夫。

「や、やったー 頂上だ！」

「ふう、やれやれ」

三人がかりで、ようやく坂の頂上までたどりついた。が、そこは、まるで自衛隊。びっしりと整列させられていた黒ずくめ、詰め襟の男子生徒ばかりが目立っていた。ふつふつと沸き上がって来る怒りを抑えながら、如月敦夫社長がわなわなしながらつぶやいた。

「康夫……。女の子が異様に少ないか？」

「当然だよ、工業高校だもん」

「何だと！ 聞いてないぞそんなこと！ 私に無断でいつ決めたんだ！」

「普通科に、アンドロイドの受入先が全然みつからなかったんだ。で、ここなら彼女の得意分野が活かせるし、簡単な故障なら電気科の先生たちに頼んで何とかかなると思って……」

「大莫迦者っ！」

「ひいっ！」

如月敦夫は息子を一喝した。康夫はその怒濤の迫力に思わずたじろいだ。

「私は彼女に、乙女らしさを身につけて欲しい、そう願っていたというのに、貴様という奴は、どこまで非常識なんだ！ これではオオカミの群れに放り込まれた、あかずきんちゃん同然ではないか！ それにだ、ピラニアの群れに放り込まれた野うさぎのようなものであって、どんな目に遭うかわからんぞ！ これでは男の巣窟ではないか！ それにだ！」

訳の分からない例え話は延々と続いた。

「あの一、お言葉ですが……」

如月弥生の後ろを押していた、体育教師が口をはさんだ。

「一応、わが校は制度上、男女共学になっておりまして、女生徒は安心して勉強や部活動に励んでおります。だから、心配されるような危険は無いと確信しておりますが」

「無いとは言いきれんでしょうが！ 私は、私は、娘をこんな無粋な野郎どもに囲まれながら、三年間を過ごさせたくはありません」

「でもなあ親父、アンドロイドを受け入れてくれる高校なんか、今の段階ではここしか見当たらないんだ。どこ探したって、受け入れてくれないんだ。分かってくれよ」

「どうせ、油まみれになってエンジンをいじるか、その程度のことをさせるんだろう。そうに

決まっている！」

「古いな、親父。僕が彼女をどこの科に入学させたか、知ってる？」

「何科だ、言ってみろ！ 返答次第ではお前、容赦しないぞ！」

「じょ、情報技術科だよ。コンピュータの、ハードウェアと、ソフトウェアをやるんだ」

「何だと？」

そんなクラスが存在することなど、全然知らない敦夫社長。怒りがしぼんでゆく。

「じゃあ、弥生クンの得意分野じゃないか……」

「だろう？ そこは、他のクラスよりも比較的小となしそうだから、安心して勉強できると思うよ。友達の心配だっていないと思うよ」

「が、しかし……」

如月敦夫は、まだ煮えきらなかった。てっきり、女子校に志望を決めさせたのかと思っていた。しかし、サポート体制の不備や、メンテの心配から、普通科はどこも受け入れてくれなかった。

「さあ、入学式が始まるよ、親父！ 元気出せよ、心配ないって！」

桜は咲いたか？

ここは、千葉県立習志野工業高等学校。「某ヤンキー学園ドラマ」のロケ地にもなるほどの学校、と言えば察しがつくかも知れない。建前としては男女共学なのだが、目下998人の男子生徒がいて、女子はたったひとり。情報技術科一年、佐倉朋美だった。

入学式当日。事前の打ち合わせが行われるホームルームに向かって、この春の新入生が続々と集まり始めていた。

（ふう……。予想していたとはいえ、案の定、オトコばかりねー）

どことなく大人びた気怠い仕草で、机に頬杖をつきながら窓の外を眺め、佐倉朋美がひとり、ため息をつく。志望校である千葉県立習志野工業高等学校、情報技術科に、この春入学を果たした新一年生だ。彼女にとって「女の子でも安心！」とか「未来を切り拓く確かな技術力！」というキャッチコピーにまんまとだまされて……もとい、魅力を感じて志望したらしい。学区内の公立普通科を取って受験せず、近所の私立女子校も、なかなかの成績でありながら、敢えて袖にした。

佐倉は思った。

（なーんだかむさ苦しいのもいるけど、これって逆ハーレム状態よね！！）

彼女は、同じく情報一年、水口祐介と幼なじみだったのだ。しかも、そこそこの私立女子校を袖にしてまで、そこそこ美形で、格好良くて、理知的で頼りがいのある彼氏と、同じ学校に入学したのだった。

「よっ、ミズグチ！」

「お、お前！ 線路の向こう側の、私立習志野学園女子高校じゃなかったのか？」

「ううん、コンピュータも面白いと思って……」

「面白い……って、まさか、お前……」

「うん、腐れ縁なら、とことん付き合っちゃおうかな、って思って」

「はああ……」

「何よ、その溜息……わたしはね、わたしはあなたの為を思って……」

「顔が赤いけど、どうした？」

「べ、別に！」

そして、彼女を待ちかまえる現実の「逆ハーレム」が実現した……が、多少（いや相当）アグレッシブでガッツあふれる学校だったので、たとえば上級生の色魔に学校中追い回されるとか、同級生にスカートの中身をはがっちり覗かれた、などなど、そういった細々したアクシデントも多々あり……。彼女自身も「ガッツあふれる女子」だったので、問題なく現在に至っていた。

まさか、そんな史上最強彼女に天敵が現れようとは、夢にも思わなかった。が、しかーし！ 体育館での入学式で、事態は一変する。佐倉朋美が構築した「逆ハーレム」状態、崩壊の瞬間だった。

「如月製作所さんから、アンドロイドの新入生『如月弥生』さんで一す、皆さん拍手ー！！」
「おおおおっ！！」「び、美人！！」「つーか、可愛いんだよ！！」「萌えー！！」「オ、オレ、持って帰りたい！！」

ちょっとだけ大人びた端正な顔立ち。ちょっとだけ古風な黒髪。如月製作所の会長が、昭和六十年代に交通事故死で失くしてしまった「長女」をそのまま、アンドロイドとして復活させたのだ。茶髪、金髪、パーマメントなどのいでたちが多い中で、むしろ彼女の清純さは、998人の男子生徒のハートを一瞬のうちに貫いてしまったのだった。

「何よ、あれ。何なのよ。スポットライトなんかあびちゃって。ふざけんじゃないわよ。女子はアタシが一番なんだから。男も男さ。あれのどこが『萌えー』なんだよ……ねえ、水口？」

「や、弥生ちゃん、萌えー！ こっち向いてー！」

「あんたまで萌えてんじゃねーよ！ 歯ア食いしばんなさいよ！ ぶつわよ！」

「萌えー！」

「ふざけんじゃないわよッ！」

バキッ……

「どうした水口、なんで床で伸びてるんだ??」

「先生、佐倉が拳骨でコイツをぶちのめしました」

「なに、またか。どつき漫才だったら大阪でやれ」

◇ ◇ ◇

教室にひとり、初老の男性が入ってきた。何も知らない生徒のうちの何人かは「あたまのてっぺんの髪の毛が薄い用務員さん？」だと思っていたが、なぜか書類を持っている。しかし、このように誰かが来た、と気づいた生徒はむしろ希で、あたまのてっぺんの髪の毛が薄い彼は、この群衆からは完全に注目されていなかった。

「えー、今日から君らのクラスを担当する、情報技術科の加藤だ……」

「あれ？ お前！」「あー、同じ中学の！」「やっだー、もうシャレになんねえって感じ」「なんだよなんだよー」「いーだろー、べっつにー」

「えー、お前ら、静かにしろ（汗）」

「それでー」「あはははは」「バーカ」「ざけんじゃねーぞー」「え、うっそ、マジ？マジ？」「しょうがねーなー」「たまんねーっす」「またかよ」「いいじゃんか」「なんだそりゃ」「でさー」

「おーい、静かにするんだ」

「お前、中学でオレから借りた本返せ」「え？ 返してなかったっけ？」「やるとは言ってネエ」「ジャジャーン」「あ！ 出たな、こいつ」「そうさ、同じ高校ってワケ」「おーい、ちょっとやめろー」「ぎゃはははははは」

「……」

彼らを静かにさせるということは、幼な子に向かって「目の前のおやつを我慢しろ」というのと同じぐらい難しいと、彼は認識していた。

本来なら、彼としては機関銃を空中に向けてぶっ放してやりたい気分だったが、教壇に立つ教師である以上、さすがに機関銃はぶっ放せないのも、本来の用途と違う使い方ではあるものの、新品のチョークを握り、手頃な大きさに砕いた。そして。

「お前らあああああああああ！（怒）」

ビュ、ビュ、ビュン！ 空を切る音を立て、キレの良い変化球が彼らの顔面に向かい、瞬く間に数発ヒットした。

「あうっ」「はうっ」「のわぁ」

かくして、その教師の放つチョークの無差別爆撃によって、クラスはようやく、本来あるべき静寂な空間を確保することができた。

「はじめまうす！」

独特のカツゼツを放った後、その教師と思われる人物は、目の前の生徒とアイコンタクトをすると、アゴで彼に挨拶をするように求めた。飲酒直後のような血走った目と、脂ぎった顔、食いしばった歯、そこからほとばしる酒臭い息など……ガンを飛ばされた男子生徒は瞬時に硬直し、

その命令を拒むことはできなかった。

「起立、礼、着席……」

「ヲホン！ あー、今日から、ここにいるみんな、34人と『1台』を担当する、オレが、教務主任の加藤だ。名前はなー、黒板に書いてある通り。読めないヤツは小学校からやり直せ！ ……まあ、君らが良ければ、まあ、この際だからよろしくしてやってもいいかな？ と思うワケだ。ええなー！」

「せ、先生」

「何ですかぁ？」

（……そ、その顔で、近づいて睨まないで欲しいな）

「どーぞ、話があるなら言ってごらんなさい。遠慮なんかすんじゃない」

「そ、その『1台』って、何すか？」

「それを今からおまいらに説明しようと思っていたんだオレは……さて！」

バアアアン！ 出席簿を教卓に叩き付けると、彼は本題に入った。

「一台、と言ったのは他でもない。オレもこういうケースは初めてなので、諸君にどう説明しようか非常に頭をひねった。ただでさえ、おまえさんがたは初対面で？ シャイで？ さぞかし自己紹介などという面倒なこともしなきゃなんないが……美浜中から来た水口クン！」

「は、はい！」

「彼がその一台……ではない。キミー、よく知ってるんでしょー、前から」

「え、ええ、まあ……ネットで如月製作所に毎日アクセスして……」

「そう！ ここがポイントだ！ 東京証券取引所一部上場の制御機器メーカーに、如月製作所という会社がある。そこで作られたアンドロイドが、今回の新入生の中に混ざっている。」

「えー、誰だ、誰だ？」

「アンドロイドって、あの、ロボットの……」

「しかも！ このクラスにいる。何なら試しに見渡してごらんなさい……」

教室は再びざわめき始めた。同級生の頬をつねって「お前人間か？」「あたしじゃないー」「誰だよ」「知らねーよ」「あいつか？」「ぼ、僕は違うよー」「じゃ誰だよー」

バンバンバン！「ヲホン！ どうですかぁ？ 見つかりましたかぁ？」

全員が、首を横に振って「そんなもんいねーよ」という顔をしていた。

「あーっはっはっは、そうでしょう、そうでしょう。数えてみてごらんなさい。たぶん、1人足りないはずだ。そう、このクラスは全部で35人！ この名簿にもちゃーん書いてある！ しか

ーし！　ひとり足りないはずだ。……もう高校生なんだから、人間の数ぐらい数えられんでしょー、君たちー」

全員がキツネにつままれたような顔をして、居並ぶクラスメイトの数を真剣に数えはじめた。

「はっはっは。キミらを見ていると、面白いですねー。ゆかいゆかい。さあ、そろそろいいでしょう。入ってもいいですよ、如月さん！」

ガラガラガラ……前側の扉が音を立てて開くと、作業着の上下を着た、いかにも電機メーカーというような男性の後を、しずしずと付いてくる少女がいた。全員がその端麗な容姿に息を呑んだ。紺色のスカートと切りそろえられたショートヘア。それに、真っ白な陶磁器のような、きめの細かい肌。彫りの深い顔立ち。

スタイルはそんなにグラマラスではなかった。が、そこにいる誰もが、少女の顔立ちの美しさに息を呑んだ。うつむき加減で入ってくる彼女をの瞳を見ると、確かに珊瑚礁の海のような青。深くて青い瞳をしていた。

「さあ、キサラギさん、どうぞ」

加藤に促されると、作業着の男性が軽く皆の前で会釈をした。

「えー、はじめまして。如月製作所、馬込工場技術部、如月康夫といたします」

全員が、誰だこのオッサン、何しに来た？　というような顔で見ている。

「皆さん、アンドロイドというものの存在を、何かの本でご覧になったかも知れませんが、物語の中で見たよ、とか、言葉だけは知っているよ、という方もおられるかも知れません。アンドロイドは、かみ砕いて言えば、知能を備え、自分で考え、行動できる一種のロボットと理解していただいて良いかと思います」

一同「ほおー」

「で、これまでに幾多の研究者がその実用化を目指していたのですが、このたび、私どもの会社のプロジェクトチームが、日本初！　いや、世界で最初のアンドロイド……自律制御型といいます……その試作機を完成させたのです！」

ふーん、なるほどねー、へー、マジ？　という顔で、ヒソヒソ話が増幅していった。

「こらおまいら！　まだ話は終わっちゃいない。黙って聞くんだ……」

アゴをしゃくって威嚇されると、クラスはまた静寂を取り戻した。

「……で、私が、作ったのが、この子……先生？ ちょっとチョークいいですか？ 板書したいんですが」

「どうぞどうぞ」

教室がまたざわめき始めた。このオッサンが、もしかして、あの子を作ったのか？ こんな、中肉中背の、何のことはない、平凡なメガネ野郎が？ そんな、うそだ一、本当かよ……ありとあらゆる反応が起こった。

「わたしは、如月……弥生といいます。皆さん、よろしくお願いします」

ぺこり……と頭を下げた彼女は、誰が見ても絶対に機械だと信じられなかった。頭を下げ、さらに胴体と首の位置が元に戻ってゆく挙動がスムーズで、その後、恥ずかしそうにモジモジしたり、頬を赤らめたり、楚々とした仕草には一切機械臭さがなかった。

如月弥生は教師に促され、水口祐介の隣の席に着席した。クラスじゅうが、相変わずざわざわしていた。たったいま椅子を引いて着席した、不思議な瞳を持つ少女。ごく自然な仕草の彼女の、一体どこが機械仕掛けなんだろう……誰もが信じられずにいた。

「や、弥生ちゃん……」

「祐介ッ、また会えたねッ」

「や、や、や、弥生ちゃん……」

水口はかつて、画面越しに如月弥生とチューをしたこととか、深夜、画面越しに好き好き攻撃をされたこととか、その他これまでの恥ずかしい経緯の一切合切を一気に思い出すと、たちまちのうちにその場で顔が赤くなった。それを見てもなしに見ていた佐倉朋美。

（なーによ、あれ。なにに取り乱してんのよミズグチ。まったく、彼女のどこが特別だってーのよ。アンドロイド？ それがどうしたってーの？）

「なに緊張してんのよ！ バッカじゃないの、ミズグチ！」

「な、なな、何でもねえよ！」

「よだれ、よだれ」

「うっ！」

「みっともないったら……ったく、メカ相手に欲情してどうすんの」

「くすっ」

如月弥生は、水口の隣で幸せそうだった。

幕張メッセのアンドロイド・フェス！

とある日曜日。千葉市美浜区の幕張メッセ。各種ロボット、輸送機、介護機械の展示が行われている一角で、アンドロイドの如月弥生が、初めてステージに上がって、フリフリのコスチュームに身を固め、星型をしたパーツが付いたステッキを振り回して踊り、歌うということで、マスコミ関係者から、オタク系のおおきなお友達まで、揃いも揃って、観客数は千五百人以上！ 如月製作所の「利益垂れ流しセンター」が誇る、史上初「恋をする機械」の登場に、会場は開演前から熱気に満ちていた。

サーバー上のバーチャル・アイドル時代から、ネットで付き合いのある男共たちの熱気は凄まじかった。その傍らで様子を見ている、如月製作所のスタッフ。もちろん、如月康夫と伊地知晃が、ハッピー姿でメガホンを持って、はしゃぎ回っているのは言うまでもない。

その中で、同級生として、唯一クールに舞台袖で観ている、水口祐介と、おまけに佐倉朋美。それに、思考ルーチンを考案した高橋聡子がいる。高橋女史は、非常用停止リモコンを手に、怜悯な眼差しでステージの司会進行を務めていた。また、熱血漢、勝田耕平は、野郎共の暴走対策として、舞台袖で、金属バットを手に、いつでも彼らに打撃を与えられるような体制を取っていた。

そして、この課の悩める課長、森沢靖彦は、ステージ脇のビジネス向け来訪者との名刺交換、カタログの手渡し、レンタルなどの商談などで、目下、ステージどころではなかった。よその会社のお偉いさんに向かって、ペコペコ頭を下げている。

◇ ◇ ◇

やがて、楽屋から、水口祐介、佐倉朋美のもとへと現れた、製作所13号機、如月弥生。幾分緊張している面持ちだった。

「と、ともみちゃん、わた、わたし……どうしよう……すごくドキドキするー」

「まあ、いつも通りのあんたでいいんじゃない？ 歌って踊るだけだから」

「ゆ、ゆうすけー、ゴメンねー、みんなに愛想を振りまくななんてそんな……」

「大丈夫！ プログラム通りに踊って歌えば心配ない！ 頑張れ！」

「うん！ 頑張る！」

高橋女史が言った。「本日は、お足下の悪い中、当、如月製作所のアンドロイド・フェスにお越しいただき、ありがとうございます。只今、開演5分前です。場内ではお静かに、マナーを守ってご鑑賞いただければ幸いです。それでは、開演まで少々お待ちくださいませ」

5分後、ピンスポットライトに照らされた、如月弥生が姿を現した！ ピアノの伴奏に合わせて、童謡の「きらきら星」を、英語で歌い始めた。コスチュームは水色のフリフリなツーピース。髪型はツインテール。そして、右手には、魔女っ子もののような、先端に星がついた短いステッキを持って、歌に合わせて振ったり、そうかと思えば、踊って見せている。そのプリティーさに、思わず息を飲み、やがてどよめく観衆！

♪Twinkle, twinkle, little star, how I wonder what you are♪

♪Up above the world so high, like a diamond in the sky♪

♪Twinkle, twinkle, little star, how I wonder what you are♪

「きらっ☆」「あはっ☆」

如月弥生が言う。演奏が止むと、拍手と歓声が場内を包んだ。高橋女史が、司会進行をつとめる。

「英語版のきらきら星でした。このように、自由自在に踊って歌えるアンドロイドは、他に類を見ません。では、弥生ちゃんに自己紹介をしてもらいましょう。弥生ちゃん、どうぞ！」

「皆さん初めまして！ 如月製作所のアンドロイド、如月弥生です！ どうかよろしくね！」

「うおおおー」

湧き起こる歓声。水口祐介と同様、ネット上でのバーチャルアイドルとして頻繁にアクセスされ、いつか制作されるであろう、原寸大実物の如月弥生を待ちわびていたファンが多数いる。

「では、次の曲を歌います！ トウインクル・トウインクル・リトル・スターです！」

「わあああー」

♪トウインクル トウインクル 気になるんだよ♪

♪トウインクル トウインクル 君のことが♪

♪いつもー 笑顔でー 見つめてオンリー・ミー♪

♪トウインクル トウインクル……♪

「くるくるくるくるー、きらっ☆ あはっ☆」

やがて場内は総立ちになり、弥生コールが叫ばれていた！ サイリウムを激しく振って。

「YA・YO・I、YA・YO・I、YA・YO・I、うおおおー」

そして、最後の曲が流れると、アンコールを求める声が！

「アンコール！ アンコール！ アンコール！」

やがて、アンコールも無事務めた如月弥生は、ぜいぜい息を切らせてみんなにこう言った。
「今日はどうもありがとうございましたー！ またネットでも応援してね！ キラッ☆」

そして、高橋女史が、最後にこう締めくくった。
「ご来場の皆様へ、本日の演目はすべて終了しました。ご観覧いただき、誠にありがとうございました。
また、これからも、株式会社如月製作所をよろしくお願い致します」

国産初のアンドロイドは何かと忙しい

ここは、情報技術科が専門に使う「情報棟」と呼ばれる建物。コンピュータ室がある二階とは対照的に、ひと気のない一階の「第二実習室」という地味な教室がある。そこには、如月製作所から貸し出された、如月弥生専用の充電ベッドがあった。ベッドというよりは、立てかけられた、縦長の楕円型のカプセルといったたまたま。昼休みは、欠かさず充電をしに来るのだ。

内側から鍵がかけられるとはいえ、廊下もガラス戸なので、如月弥生が充電しているベッドが一般の生徒にも見えるようになっていた。本来なら、男子禁制の「女子更衣室」でもあれば理想なのだが、あいにくここは工業高校。男の園である。そんな気の利いた施設はなかった。

「おい、木村」

「何だよ、鈴木」

「眠ってる弥生ちゃんに触ってみたいくはないか？」

「異議なし！」

「よし、校庭から出撃だ！ 裏へ回れ！」

「オッケー」

二人は、廊下の端にある非常口から、校庭伝いに歩き、第二実習室のドアのガラス、その鍵の辺りを割った。「大丈夫か、割った音聞こえてないか」「平気平気」ほどなく鍵を開けると、そこには、紛う事なき、憧れの如月弥生が、寝息を立ててすーすーと眠っている。カプセルの上の方には、黒地に青のLEDで「70%」と表示されていた。両名は、透明なカプセルを開けた。

「なあ、スカートめくってみないか」

「それよりも、胸だろ、バスト、バスト」

「じゃあ、同時にやっちゃえ！」

二人は、ぺらぺらスカートを何度もめくって興奮し、胸の感触を確かめながら同じく興奮していた。が、しかし。

(／／／あ／胸をもまれてる／スカートも覗かれている／／ということは／わたし.....)

「ぎゃああああー」

起きた。そして、如月弥生が叫んだ。セクハラをしている両名は、まだ事の重大性を認識していなく、世間話を始めた。

「おお、びびったー」「なんだ、寝てたんじゃないのか」「スタンバイモードだろ」

如月弥生の瞳が変わった。索敵モードに変わり、ギンッと目つきが変わった。

「お前ら……私の秘所を触るとは、いい度胸だな」

「ひいっ！」

普段とは余りにも違う態度に、驚きと恐怖を感じる学生二名だった。

「……こら待て！ 逃げるな！」

逃げようとする二人を、凄まじい速さで追いかけて、襟首の後ろを両手両腕でつかんでギリギリと締め上げる。そして、遠心分離器のように、または、ヘリコプターのようにぶんぶん振り回した後、ドッカーンという音と共に、堅いはずのコンクリートをぶち破り、上空へとかなぐり捨てられてゆくのだった。

◇ ◇ ◇

「部活？ アタシは運動部系よ。ゼッタイ」

「佐倉、言い切るのな、お前」

「サッカー部は女子ダメなのかしら。祐介は？」

「オレ、何にしようかなあ……弥生ちゃん、どうする？」

「えー、祐介、これってどう書くの？ いっぱいあるー」

「そうだよな、全校生徒が千人からいる学校だからな、目移りするの無理はないよなー」

「第三希望まであるけど……」

「ここに、好きな部活動を書くんだ。それで、先生に提出する」

そこへ、黒ずくめの詰め襟集団が、マイクと録音機材を持って集団で現れた。

「どけ、どけどけッどけー！ 放送部だー！ 如月弥生ちゃんはいるかー！」

「い、いって一気をつけて通ってくださいよ先輩方！」

「祐介、だいじょぶ？」

「君が、如月弥生ちゃん、かな？」

「は、はい？ あ、あたし？ ですが……」

「おお、彼女が噂に聞く弥生ちゃんだ！」

「か、かわいいー」

「放送部、電気科三年の広瀬だ。放送部長をしている。よろしく」

「ふええ……」

「実は、弥生ちゃんに放送部のアナウンサーになって欲しいんだけど、いいかな」

「えー、あたしが、ですかあ？」

「このテレコミュニケーションの時代、我が習志野工業の放送部は、多メディア、多チャンネル化を推進している。オーディオによる校内放送のみならず、ミニFM、そして校内テレビジョンまで、十分な機材と充実した放送内容で君を待っている！」

「フォトジェニックなそのルックス！　なによりアンドロイドは無遅刻無欠席！　二十四時間闘ってもこの笑顔！　弥生ちゃん、君は誰がなんと言おうと放送部にふさわしい！　ぜひともこの欄には放送部と書いてくれたまえ！」

「はうー」

「弥生ちゃんの、アナウンス姿もいいかも知れない……」

「ブルーレイにでも録画するの？　ミズグチ……」

「オレも一緒に出る……」

「はあーあ、言ってなさいそうやって。アタシ呆れちゃう」

やおら、ドアが開いて、肩幅の広い、健康的なキツネ色の肌をした一団が現れた！

「そどこけえええ」

「誰だお前ら！」

「水泳部だ！　廊下で聞いていれば何だ何だお前らー！　この純粹可憐な弥生ちゃんをだな、あーんなほこり臭い放送室に押し込めようとは言語道断！　ささ、こんな不健康な連中と違ってだ、健康的なお兄さんたちと一緒に、太陽の下で、インターハイを目指さないか！」

「……ええ、でも……」

「や、弥生ちゃんの、み、水着姿もいいかも知れない、見てみたい……」

「ちょっとミズグチ、鼻の下すごく伸びてるんだケド」

「うそ、どれぐらい？」

「オジサンじゃないんだから、いい加減にきなさいよね」

水口祐介の妄想をよそに、いままさに情報一年のクラスでは、放送部と水泳部が雌雄を決しようとしていた。壮絶な罵りあい発展しつつあった。

「莫迦野郎、筋肉でしかモノ考えられないお前らに、おめおめと弥生ちゃん渡せるかってーんだ！」

「そうだそうだ！」

「そっちこそ、うさんくさい格好しやがって！　その汚ねえカメラのレンズでも黙って磨いてろ、引っ込んでろってーんだ！」

「高校生のくせに、業界人気取ってんじゃねー」

「なんだとおおお！」

「あの、その……あわわ……やめてください……」

「弥生ちゃんはうちのものだ！」

「いいや、我が水泳部だ！」

「そうはさせるかー！」

ドアを蹴破って、また違った集団がクラスへ乱入して来た。クラリネット、オーボエなど、見慣れた金管楽器を手に、吹奏楽部が乱入して来た！

「無粋な連中ども！　そこをどけええい！　如月弥生ちゃんは、我が吹奏楽部がいただいた！」

「勝手に決めんなよ！」

「君も一緒に、名曲を奏でて、我が校の文化的水準を高めてみないか！　こんな文化の水準の低い連中と一緒にするのは、君がかわいそうだ。勿体ない」

「なんだとこの野郎！」

「やる気だなあ！」

「うりゃうりゃ、こうしてやるううう！」　ゲインッ！

「あたたた、楽器で殴るなああああ！」

「待て、待て待てえええい！」

「あ、あの一、わたし、水口クンと同じ部活動に入りたいと思います……」

つかみ合いのケンカをしていた一同が、ぱたりと手を止めて、如月弥生のほうへ向き直った。

「水口？　こいつのことか？」

「そうでなきゃ絶対イヤです」

三年生の視線が、一気に水口祐介に集中した。

「お前の決断次第だ。お前の存在はどうでもいいが、弥生ちゃんはお前次第だと言っている……」

「さあ、お前は何部にするんだ……」

「水口クン、君次第なんだからな！」

「そ、そんなこと、急に言われても……」

水口祐介は携帯電話を取り出すと、ある人のところへ電話をかけた。

「どこかけてんだ、お前？」

「如月製作所です。弥生ちゃんの、メーカーです」

「ほおー」

「あ、もしもし、水口です。どうも。康夫さんですか？ お疲れのところ済みません。実は、弥生ちゃんの部活動の件なんですけど……水泳部は……防水加工出来てないから、駄目……じゃあ放送部は……ＯＫですか！……アナウンスがいいんですね……なら吹奏楽部は……楽器は苦手？別にプログラムが必要？　じゃあ……はい……」

「じゃあな運動部」

「くっそー」

「バスケットなどの球技は動体視力が足りないのでダメ、機械体操は関節……っっていうか、ジョイントに無理がかかるからダメ……」

「どうするの祐介」

「……ほ、放送部の皆さん、よろしくお願いします」

「うわーい、アナウンサーデビュー！」

「弥生ちゃん、我が部に来てくれてありがとう！」

こうして、如月弥生は、無事に放送部デビューを果たしたのでありました。

◇ ◇ ◇

放課後、校門前に多数の報道陣が押し寄せていた。教頭先生は彼ら報道陣を押しとどめるので精一杯の様子で、メモを片手に説明を繰り返していた。

「貴校にアンドロイドが入学したって本当ですね？」

「それは、間違いじゃないですか、そんなＳＦみたいなことがある訳がない」

「隠さないで教えてくださいよ、裏はとれてるんですから」

「ですから、ここは教育施設であって、ここから先にお入りいただく訳にはいきません！」

「少しぐらいカメラの前に立ってもらって訳にはいきませんか」

「いないアンドロイドに、どうやって立ってもらうんですか！」

「どうしてですか、いるんでしょ！　隠さないでください！」

下駄箱のカゲで、佐倉朋美が隠れて見ていた。そこへ、何も知らない水口と弥生が現れた。

「なにコソコソしてんだ佐倉」

「しーっ！　いま出るんじゃない弥生ちゃん！　それにミズグチ！」

「どうしたんだ」

「報道陣が群がっていて、弥生ちゃんを出せってうるさいの」

「オレは有名希望だけど……いま弥生ちゃん出すとまずいよなあ……」

「いま出ていくと、弥生ちゃんどうなると思う？」

「たぶん、報道陣の質問責め。その後は全国ネットのニュースでネットされて……学園生活どころじゃなくなるなあ」

「ふええ、まさか、みんな、あたしを取材しに来たのお」

「その”まさか”よ。いま出ると、お茶の間のネタになっちゃうわ」

「ふみゅーん」

「どうする、佐倉」

「うーん、ここから無事に出るって……救急車はどう」

「手っ取り早いけど……アンドロイドを病院まで運んでくれるかなあ」

「目立たずに連れ出すには……」

「如月製作所のワゴン……まるわかりよね」

「と、とにかく康夫さんに相談だ！」

東京都大田区西馬込の、如月製作所馬込工場……

「……如月製作所、技術部設計課分室……水口クン？ 高橋です。え、報道陣が群がって、学校から出らんないって？ ちょっと待ってね。チーフに代わる、呼んでくるから」

「……どうします、チーフ」

「うちのクルマで行ったら一目瞭然だよなあ」

「……救急車は」

「機械を載せて運んでくれるかよ」

「あ、それもそうね」

「水口クン聞こえる？ もう少し隠れていてくれない？ 保健室かどこかへ……保健室……そうか、保健室か！ 保健室の先生、クルマ持ってない？」

『クルマ、ですか？ 訊いてみます』

「馬込まで載せてもらうの気が引けるからさ、津田沼の駅ぐらいまで載っけてもらうの、どう」

『わかりました』

「橋本先生！」

「どうしたの、あらあら、具合が悪いの？」

「先生にお願いがあるんですが、ひと芝居打ってくれませんか？」

「……芝居？ 芝居って……」

「弥生ちゃんの肩を持って、報道陣にアンドロイドだって悟られないように学校を出て欲しいんです。ほら、先生もご存じでしょうけど、すごい報道陣が……」

「そうね。確かにあれは異常ね……」

「先生、お願いします。このままじゃオレたち帰れないし……」

「わかりました。如月さん？」

「は、はい？」

「思っきり具合悪そうにするの。ほら、じゃなくて……そうか。アンドロイドだから、具合悪

くなったことないんだ……」

「佐倉、模範演技やってよ……」

「ったく……弥生ちゃん、見ていて。具合の悪い人ってねえ……こんなに青い顔をして……先生にしなだれかかるように……こう……げほっ、げほっ……てね」

「ふむ、ふむ……」

「学習した？」

「と、とりあえず……」

◇ ◇ ◇

「それで教頭さん、どうなんですか、習志野工業にアンドロイドはいるのかいないのか」

「いないって言ってるでしょうがあんたら！ 帰ってください！ 甚だ迷惑だ！」

「帰れって言われても……うちも仕事で……」

「さあ、いまのうち、弥生ちゃん……」

「うげー、気持ち悪いー」

「そうそう、その調子！ もっとびっこ引いて……」

「あー、もうダメー、吐きそう……」

「ゆっくり、ゆっくりな」

「気取られないようにしなさいよ、大丈夫？」

「げふっ、ごふっ」

「振り向くなよ……振り向くと、その青い瞳でばれちゃう……」

「え……あたし……一瞬だけど、振り向いちゃった……」

「ディレクター、あそこ！」

「青い瞳のアンドロイド！」

「いたか！」

「いたぞおおおお！」

「青い瞳のアンドロイドがいたぞおおお！」

「追え、追えええええ！」

「皆さん、あれが、如月製作所の新型アンドロイドです！」

「いけない、早く乗って！」

ボタン！ ブロオオオオン！ キキッ、キキキキュアアアー！

橋本先生の銀色のプリウスが、弥生ちゃん、水口、佐倉を載せて、急坂を駆け下った。

「ばかああっ！ バレちまったじゃないか！」

「ご、ごめええん」

「明日からこの手は使えないわね」

「顔が割れてるから、もう無理ですよお」

「早稲田に入学したヒロスエの気持ちがよくわかった気がする」

「感心している場合か、うしろ、うしろ！」

「物好きが多いわね。撒くわよ！」

「どこ行くんです？」

「彼ら、中継用の大型車でしょ、だから、路地とか商店街とか……」

「佐倉、携帯貸して！ 電池切れた！」

「まったく、東京へかけんのー？ 後でお金払ってよー。安くないんだからー」

「もしもし、康夫さん？」

『はい、如月製作所……高橋です……水口クン？』

「高橋さんですか！ いまマズいんです！ クルマで突破したのはいいけど、後ろから報道陣がガンガン追ってくるんですよ！」

『いま、保健室の先生のクルマの中なの？』

「そうです！」

『都内まで来てもらうしかないのかしら……』

「今、先生が商店街に入って、大型車を全部撒いています」

『電車に乗ったとしても、報道陣ついてくるわね……』

「そっちで、何とかありませんか」

「水口クン」

「なんです、先生」

「記者会見でも開いてもらわないと、学校としては迷惑だわ」

「そうですねえ、あ、高橋さん、記者会見って開けます？」

『記者さん相手に、レジュメを配るぐらいならできるわ』

「そうしてください。先生も、記者会見開いてくれなきゃ迷惑だって」

『……そうかも知れない』

「それから、水口クン、このクルマ、どこまで走ればいいのって、如月の会社の人に訊いてみて」

「あ、もしもし、とりあえずこのクルマ、どこまで走れば……」

『先生には悪いけど、大田区まで来てもらわないと』

「西馬込ですか……うわちゃー」

「水口クン、それ本当？ 東京まで？ わたし、家で子供が待ってるんだけど……」

「高橋さん、先生が、家で子供待ってるって……」

『謝っというて、代わりに、ごめんなさいって』

「済みません、ご、ごめんなさい先生」

「済みません先生」

「……ま、いいか、こおんなに大騒ぎなんだし……ちょっと飛ばすわよ！」

「うおっとお！」

クルマは東関東自動車道の湾岸習志野インターへ滑り込んでゆく。

「まだ追っかけて来ますよ、先生！」

「追いかけてさせりゃいいじゃない、この際……1300CCじゃ厳しいわね……」

「踏み込んでます、アクセル？」

「私はゴールド（免許）失いたくないの。だから、80キロが限界かな」

「まだ追ってくるわ」

「しつこい連中です」

「水口クン、カーナビつけて」

「はいはい、セットします……えー、湾岸市川から、11号湾岸線、有明ジャンクションまでこのまま、そこから先は有明ジャンクションからお台場、お台場通って谷町ジャンクションから2号線を戸越まで……」

「オッケー、まったく、とんだドライブになっちゃったわねー」

そのころ。如月製作所馬込工場のラボでは急遽、記者会見のセッティングが行われていた。記者会見といっても、高級ホテルなど借りるほどの予算がある訳でもなく、ただの会議室で、高橋聡子はじめ、黙々とコピーの準備に追われていた。

「まったく、ばれちゃうんだもんねー」

「チーフもチーフです！　なんであらかじめ記者会見開いておかなかったんですか！」

「ごめえん、マスコミが、まさかあそこまで熱心だとは思わなくて」

「はああ……」

一方、クルマの中では……。

「戸越の出口です。早いなあ！」

「如月製作所はどっち？」

「あの一、僕は電車でしか来たことないから……」

「えっと、その角を左です。しばらくまっすぐ！」

「さすが弥生ちゃん」

「なに言ってんの、地元だから当然よ」

「あ、あそこ！」

「やっと着いたあ！」

「こっちょ13号！」

「こんばんわ！」

「もう始まるわ、さあ、早く！」

「あたし、ヘトヘト……」

「それはもういいから、行かなきゃ」

◇ ◇ ◇

「……記者会見をはじめます。私は如月製作所本社広報部の山本です。司会を務めさせていただきます。質問はプレゼンテーションの後で、改めて時間を設けますので、あらかじめご了承ください。皆さん、お手元に資料は行ってますでしょうか……」

……このように、とりあえず、マスコミ向けの記者発表がひと通り済んだ。

「いやー、ごめんどめんど、済みませんでしたあー、こんな夜遅くまでー」

「仕出し屋に頼んでおいた分があるので、よかったら食べて行ってください」

深夜10時、如月製作所。記者会見の済んだ康夫さんのラボ。水口に加え、佐倉と橋本先生も会議室の椅子でぐったりしていた。

「折り詰め弁当っすか。いただきます……」

「お腹すいちゃった」

「千葉に戻る頃には明日になっちゃうわ、早く食べて」

「ところでさあ、佐倉」

「なあに」

「弥生ちゃん、どうやって食事してんだろう」

「つままないことに興味を持つのねミズグチ」

スタッフのひとり、森沢さんが得意気に語った。

「ああ、彼女？ 彼女は交流しか食べないよ」

「電気、ですか？」

「そう、できれば、東京のゆりかもめとか、神戸の新交通システムにあるような、三相交流600ボルト。それで充電すると急速に力が出るんだ」

「……だからウチの学校なのよ」

「確かにな。電気の実験設備ならたくさんあるしなー」

「どーしても道ばたでパワーが欲しくなったら、柱上トランスによじのぼって……ビリッと……」

「電気盗んじゃうんですか」

「電気ドロボー」

「一般の子が真似しなきゃいいけど」

「東京電力さんの変電所さんをお願いして充電させてもらったこともあるしね、最初は不審がられたなあ。女の子が電気に触っちゃ危ないってね」

「どこから充電するんです」

「爪先だよ。手の指の爪が導電性になっているから」

「マニキュア塗れないね、ミズグチ」

「で、森沢さん、筋肉とかはどうなってるんです」

「いろいろ使ってるよ。普通のアクチュエーターだろ、NASAが手がけた人工筋肉だろ、それからうちが手がけた、圧縮ガスを使ったアクチュエーター。あれは足回りのフットワークが向上するしし……」

「鉄腕アトムみたいに、原子力は……」

「ああ、あれ？ あれは核燃料容器として政府の認定がいるから、今回はパス。電気やガスを扱える技術者は多くても、核を扱える技術者なんて、そうざらにはいないからね」

「ふうん……」

「森沢さん、でしたっけ」

「はい」

橋本先生が声をかけた。

「明日から、無事に電車通学できると思います？ 彼女」

「そうですねえ、心配でないといえば嘘になりますね。当面の間、私たちのうちの誰かが同行すると思いますが」

「大変ですわね」

「……それじゃ、僕たちはこれで」

「夜分済みませんでした先生！ 水口クンと彼女も、じゃあ！」

「あ、あたしコイツの彼女じゃありません！」

「隠さなくってもいいじゃん」

「伊地知さんまで！ もおっつ！」

「じゃ、失礼します」

製作所の面々と別れる高校生二名と、保健教師。

「あー、疲れたなあもう、明日アタシ絶対遅刻しそう」

「とんだ月曜日になったわね」

「まだ月曜ですか先生！ オレ、もう何日も経ったかと……」

「ふふ」

銀色のプリウスが、元来た道を帰ってゆく……。

如月弥生誘拐未遂事件？

これは、かくも酔狂な如月弥生ファンの、身体を張った、実にみじめったらしい男たちが繰り広げた、執念のドラマである。

東京都世田谷区奥沢。土曜日の如月敏夫会長の自宅。

「お、かあさんや、この郵便は何だね」

「あたしもわかんないんで、あなた、怖いから、開けてみてくださいな」

「.....ペーパーナイフをとりなさい」

老眼鏡をずり上げながら、敏夫老人は差出人が書かれていない封書を手にした。

「あなた、炭疽菌だったらどうでしょう」

「.....粉のようなものは一切入っておらんぞ」

「あらあら、何でしょうねえ、この便箋一枚だけって.....」

「な、なんじゃーこりゃ？」

白い便箋に、いかにも犯行声明文のような、新聞の切り張りが貼り付けられていた。

「なにになに.....キサラギヤヨイを綿差名けれ.....ああ、渡さなければ、お前の屋敷の盆栽に、すべて.....マツクイムシを放つので.....その.....つもりでいろ？」

「あら！ 何てことを言い出すのかしらまったく！」

「マツクイムシは困るなあ.....全部で数千万円するのに.....」

「続きは、なんて書いてあるんです？」

「ジコクは月曜日の正午、東京駅、銀の鈴のスグシタニ、ヤヨイダケ、ノコセ.....」

「あっきた.....田舎のオノボリさんみたいねえ」

「ど、どうする、お前.....」

「あらあら、慌てることないじゃないですわ、だって、うちで一番ヒマそうな孫が、馬込にひとりいるじゃありませんか」

「そうか！ 康夫じゃな？」

敏夫老人は、不器用な指先で番号をプッシュし、その犯行声明文を技術部宛にファックスした。次いで、受話器をとって、彼の孫を呼び出した。

trrrrr.....

如月製作所、馬込工場のラボに鳴る電話。

「なんだなんだー？ 朝から変なファックスは入って来るし、土曜だっちゅーのに、誰だまったくよー」

ガチャ……

「もしもし……」

「ああ、康夫か、ちょうど良かった」

「なんだよー、じっちゃん」

「ファックスは見たか？」

「これ？ これが、何だよ」

「何だかなあ、今朝ポストを見たらだなあ、こんな怪しからん文書が入っておったのじゃ」

「こいつ、じっちゃん家の盆栽を全部ダメにする気だなあ……ったく、ヒマだよなあ、どいつもこいつも」

「康夫！ 呆れている場合では無いッ！ 大至急何とかせんか！」

（まあまあ、あなた、それぐらいにして、という声が聞こえる）

「うるさいッ！ 離せ！ ワシの盆栽がかかっておるのじゃああああ」

「まあ、まあ、じっちゃん、冷静に……オレらが対策考えるから、じっちゃんは家でそのまま……」

「おお……ああ……手塩にかけた盆栽が……ワシの盆栽がああ……」

「だから、冷静になれって……心配すんな……」

「ああ、すまぬ……」

「じゃあ、茶でもわかして飲んでてくれよ、じゃあな」

「た、頼んだ……ぞ……」

ガチャ……

「……さてと。まず、どうすっかなあ」

如月康夫は、慣れた手つきで、マツクイムシをネットで検索し始めた。

「へー、営林署のページが、意外と充実してるじゃんか。なにになに？ マツクイムシの天敵……？」

次いで、週休二日を使ってチカラいっぱい遊んでいる、数名の同僚の携帯にメールを入れた。

「月曜日は、私服で、出社してください（森沢さんだけは背広で）っと、送信！」

さらに、彼は大学時代の友人に電話をかけた。

trrrrr.....

ガチャ.....

「あ、もしもし、川島？ オレー。如月ィー。いまどこよ？ いまヒマ？」

『ああ、如月？ いま自宅。特に暇でも無ければ、忙しくもないが.....』

「栃木か群馬の温泉郷へ行って、足湯ついでに、マツノマダラカミキリを捕まえに行こう！」

『また、お前は何を考えているのやら.....』

「懐石料理もあるぞ？」

『じゃあ、それで手を打った！』

「おお、我が友よ、それでこそ川島！」

月曜日――

「諸君、おっはよー！」

「なんですー、チーフまで私服で.....」

「しかも、アーミールックだし.....」

「諸君！ いま、13号機が重大なピンチなのであーる！ これを見よ！」

「お、おおーっ」

「脅迫文じゃないですか.....」

「その、とおおーりっ！ これは紛うことなき脅迫文であーる！ 13号機を渡さないと、会長の家の盆栽をマツクイムシだらけにするそうだ！」

「そ、そんな、ハツラツと言わないでくださいよ.....」

スタッフ全員が、ああ、また何かやらかす気だなチーフは、といった感じで、互いの顔を見交わしていた。

「で、チーフは、私たちに何か手伝って欲しいと、こういうワケなのね？」

「その、とおおーりっ！ まずは伊地知クン！」

「なんですかあ？ 僕に何か？」

「まず、この虫かごを持って、じっちゃんそこへ行って欲しい.....」

「中身は、なんです？」

「はっはっは.....これだけの虫をかき集めるのに友人の川島くんに休日を全部割いてもらったが.....なにをかくそう、マツクイムシの天敵！ マツノマダラカミキリである！」

「ま.....マニアックな名前の虫ですねえ.....」

「一体、どこで集めて来れんのよ、そんなもん」

「さあ伊地知クン、この虫かごを持って、早速だが、奥沢へ行ってくれたまえ.....」

「へーい、行ってきやーす！」

伊地知はドアを開けて、さっそくバタバタと出ていった。まるで、同人誌即売会でカメラ小僧にでもなってそうな、きわめてマニアックな服装である。

「森沢さんは、この犯行声明文の原本を持って、警察が来るので、警察官に渡してください。地域課の人と一緒に、ここで待機です。いわば司令塔です」

「わ、わかりました……」

「森沢さんだけ、背広なのは、そのせいだったのね……」

「で、勝田くんは、弥生ちゃんと一緒に登校してるはずだから、今頃は千葉にいるだろうねえ……」

「あいつ、大丈夫かなあ……」

「で、サトちゃん！」

「ぎ、ぎくう……」

「サトちゃんは、今から、このフリフリのコスチュームを着ちゃう！ ほれ！」

「な、な、何ですと？」

「これはもう……魔女っ子もののコスチュームですねえ……フリフリのキラキラだ……」

「そうだろうとも！ パステルブルーのこれは、弥生ちゃんが、幕張メッセのアンドロイド・フェスで着ていたコスチュームであーる！」

「……」

「急遽、僕の知り合いのスタイリストさんに来てもらったから、今から弥生ちゃんに変身タイム！ さあ、サトちゃん、会議室へゴーだ！」

「スタイリストの柳沢で一す、高橋さん、よろしくお願いしますねッ」

「ば……ばってん……」

「高橋さーん、気をしっかりー！」

「……」

三十分後――

「お待たせー」

「！？」

そこに、フリフリの窮屈な衣装に、無理矢理身体を突っ込んだ、ちょっと……いや、かなり無理がある高橋聡子がいた……。髪型はツインテールで、その無理感たるや、ラボの非常識な人間ですら一斉に引いた。

「は、はあーい、あ、あた、あたし……や、弥生ちゃん、どえええーっす」

「う、う、うっひゃああああー」

「高橋さん、笑顔、壊れてません？」

「あ、あーら、ほほほほほ……壊れているのは……全部よー」

その場でくるくる回転したかと思うと、スカートをふうわりとさせて、ニコッとポーズを決める高橋聡子！ もう、完全に壊れてしまっている！ 大丈夫か、ヲイ！

「ミラクル、マジック、るりるりらー♪」

「……」

「あは☆」

「……」

年齢を塗り固め、粉飾しているメイクといい、無理のあるツインテールといい、メルヘンの領域に突入したその水色のフリフリドレスといい……何だか、見てはいけないモノを見た気がして、その場に居合わせた男性陣は、全員が凍て付いてしまった。

「さあ、サトちゃん、このステッキを持って！」

「くるくるくるー☆」

「いざ、出撃だー！ このまま東京駅の銀の鈴へ、一緒にゴーだ！」

「はーい☆」

「じゃあ、森沢さん、後はヨロシク！」

「あ、ああ、い、行ってらっしゃい……はは……」

ボタン……

「……」

誰もいなくなった室内で、森沢靖彦は、じっと受話器を見つめた。やがて、彼は断固受話器をとって、黙々とダイヤルし始めた……

「もしもし……東京人材バンクさんですか？ 会員番号21198の森沢です……お世話になります…
…精密機械の設計職の件でお電話差し上げたんですが……」

さあ、真犯人は現れるのか？ それとも、ただのガセネタだったのか？ そして、東京駅で犯人を待ち受ける、チーフと高橋！ だいじょうぶか高橋！ 転職コンサルはまだ早いぞ森沢！

◇ ◇ ◇

東京都世田谷区奥沢。人ごみに石を投げれば、必ずどこかの社長に当たる、といった案配の邸宅街。如月敏夫老人宅の前に、康夫の部下、伊地知晃が立っていた。

「ここかあ……さて、呼び鈴を……うおっ!？」

呼び鈴を押そうと玄関に手を伸ばしたら、一匹のドーベルマンが、伊地知を激しく威嚇した。バウワウ吠えている。正直、犬が怖い伊地知。

「吃驚したー。僕は怪しい者じゃありません、よーだ! しっ、しっ!」

「バウワウ! グルルルル……ワン! ワン!」

「うー、なんまだぶ、なんまだぶ……ひー」

やがて、質素な玄関ドアが開いた。

「やあ、君か! 康夫の部下の伊地知くんというのは」

「はい! 筐体設計課の伊地知晃であります! 会長!」

「なんだ、犬に怯えているのか。さあ、ポチ、犬ガムをあげよう、おとなしくしなさい」

「……あの凶悪な犬の名前が、ポチ……?」

「で、どのような用件で?」

「はい! 康夫さんから預かった、マツクイムシの天敵、マツノマダラカミキリをお持ちいたしました! 盆栽一個につき、一匹を放つと良いでしょう……」

「おー、おー、済まんのう。なんだ、なつかしい感じの虫かごじゃな」

「ええ、まあ……」

「じゃあ、ご苦労じゃったー。さあ、会社に戻りたまえ、ありがとうよ」

「はい、分かりました、会長!」

「ではな」

ボタン、と閉じられたドア。犬ガムに必死に食らいつく「ポチ」。

「そんじゃ、任務完了ー。命がある間に帰ろうかな」

練馬ナンバーの、伊地知が所有するロリータ系の痛車が、世田谷区奥沢を走り去ったのは、その時だった。

◇ ◇ ◇

一方、こちらは都営地下鉄浅草線を経て、新橋から山手線に乗る、如月康夫と、高橋聡子。電車内で、水色のフリフリコスチュームは、かなり目立っていた。車内はざわざわとざわめいている。

「あれって、確かアンドロイド・フェスの、弥生ちゃん？」

「いや、あんなにグラマラスじゃなかったな」

「じゃあ、コスプレ？ 弥生ちゃんのコスプレ？」

「なぜ山手線に？」

ざわ……ざわ……ざわ……。

あまりのざわめきに、高橋聡子はチーフに耳打ちした。

「見られてる、わたし、見られてるー」

「よーし、その調子だ！」

「って、ちょっと！ 恥ずかしいんだってば！」

「さすがにオレのアンドロイド、人気者だなあ」

「はああ。日本語が通じないと見た……」

「新橋過ぎたらすぐだからな、スタンバイよろしく」

「は〜い☆ くるくるくるー、きらりん☆」

「よーし、その調子だ！」

『間もなく、東京、東京です、お出口右側です……』



一方、こちらは誘拐犯人たち。東京駅、銀の鈴の真下。どう見てもブサイクで、デブで、ヲタク臭のする男性二人組だ。カジュアルの着こなしもなっていない。

「ハアハア、弥生ちゃんはまだなのかナー」

「なんだナー」

カメラバッグに、秋葉原で買った戦利品など。彼らは生粋の東京人では、どうやらないらしい。いかにもオノボリさんといった感じの田舎臭ささえ感じられる。丸々と肥えた犯人が、マツクイムシチームに電話をかけた。

「あー、あー、マツクイムシチーム、準備は良いのかナー」

『それが……猛犬に腕を噛まれているでござる』

「何が何でもマツクイムシを撒くのダー、しなければ、後でお仕置きダベー」

『りょ、了解でござるー』

丸々と肥えた犯人が、電話を切った。

「ハア、ハア、弥生ちゃんの来る時間が近づいてるんだナー」

「そうなんだナー」

「お！ あれは確かに、弥生ちゃんなんだナー！」

「不潔な男も同伴なんだナー」

如月康夫と、扮装した高橋聡子が、銀の鈴に現れた！

「キラッ☆ ミラクル、マジック、るりるりらー」

「よーし、捕まえるんだナー」

「待て諸君！ 如月弥生は、手塩にかけて育てた、この世でたった一台のアンドロイド！ おめおめと渡せるかってんだ、べらぼうめ！」

「こいつ、生意気言うんだナー」

「弥生ちゃんゲットなんだナー」

「あは☆」

扮装している彼女が、実は高橋聡子であることは、マニアの彼らには分からなかった。いや、理解する知能が足りなかったらしい。そこに、鉄道警察隊の人たちが現れた！

「離せー！」

「離さないんだナー」

「僕らの弥生ちゃんなんだナー」

「う、腕が、ちぎれそう……てへっ☆」

「待て待て！ そこのアンドロイド誘拐犯人！」

「逮捕してくれるわ！ おとなしく交番へ来い！」

「え？ お、オレ？」

鉄道警察隊は、何故か、如月康夫の腕をつかむと、後ろ手に手錠をかけた。

「さあ、キリキリ歩け！ この誘拐犯が！」

「ま、待ってくれ！ 僕はアンドロイドの開発者で、如月康夫で一」

「デタラメ言うな！ さあ、話を聞かせてもらおうか」

「た、助けて一、サトちゃあああん」

「ち、チーフ！ チーフ！」

「ご、誤認逮捕だあああああー」

「チーフ！」

「ひっ捕らえろ！」

「やめてくれえええ一、ご、誤解だああああ一」

連行される、如月康夫。オレじゃない、あいつらだ、といった趣旨の事をわめいている。

「弥生ちゃん、ゲットなんだナー」

「棚ぼたラッキーなんだナー」

「ふ……ふざけんじゃないわよっ！」

高橋聡子は、素に戻って、犯人の腹や股間に蹴りを立て続けに浴びせる。ひるむ真犯人。

「ら、乱暴なんだナー！」

「本当の弥生ちゃんはそんなことしないんだナー！」

「くらえ！」

「うごっ」「ぷぎゃー」

「オフィスワーカー、なめんなよ！ この！」

「痛いんだナー！」「何するんだナー！」

「ステッキで叩いてやる！ えいっ！ えいっ！」

「助けて、助けてなんだナー」

「逃げるが勝ちなんだナー」

「弥生ちゃん怖いナリー」

「新幹線で田舎へ帰るナリー」

見事な蹴りや打撃で、真犯人からの呪縛を解いた高橋聡子！ オフィスワーカーの鑑！

「ふんっ、参ったか！ って、お巡りさんと、チーフ！ ちょっと待ってー！」

その後、駅の交番に駆けつけた高橋聡子が、誤解している警官を説得して、ようやく如月康夫の嫌疑を解いてもらったのは、もう夕陽が沈む頃だった。

「誤認逮捕で、非常に申し訳ありません」

「もうっ！ 私に腕力があったから真犯人を撃退できたの！」

「開発者に何てことするんですか、あんたら！」

「誠に申し訳ない……」

その後、高橋聡子は、駅ビルのテナントの百貨店で、十数万円するワンピースと、高級なレストランでのとても高価なフレンチを、如月康夫からゆすりたかったのは、言うまでもなかった。

「お料理代、一式で、五万四千九百五十円になります」

「じゃ、じゃあ、リボ払いで……」

「せこいわね、チーフ！ そんなもん一括にきなさいよ！」

「勘弁してくれよー」

その頃、如月敏夫会長のいる、世田谷区奥沢では……。

「おお、ポチ2号、ポチ3号、マツクイムシの犯人を捕らえたのだな！ 偉いぞ！」

「勘弁して下さいでござる一、犬に噛まれているでござる一」

「お巡りさん、こいつが一味です、ワシの盆栽に被害を与えようとした犯人ですちゃ」

「おい、手伝え、犯人を引き上げる！ かかれ！」

「了解！」

一方その頃、大田区馬込工場の如月康夫のラボでは、こんなやり取りが……。

「ただいまー」

「弥生ちゃん！ 無事だったか！」

「はい、学校からずっと、勝田くんが守ってくれました」

「それはもう課長、あちこちにガンを飛ばすのに必死だったっす」

「13号機を守ったのだな、耕平、ご苦労！」

「あれ？ チーフとサトちゃんは、どったの？」

「ああ、チーフなら、先程誤認逮捕されたが、高橋が説得して嫌疑が晴れた」

「そしたら、盆栽は無事だったのかなあ？」

「盆栽は無事だ、伊地知。犯人の一派を警官が捕らえた」

「チーフ、サトちゃん、いつ帰って来るのかなー」

「課長命令だ。もう帰っていいぞ」

「森沢さん、オレ、疲れましたっす」

「ご苦労」

「森沢さん、ボクは犬が怖かったです、会長の家のドーベルマン」

「伊地知もご苦労、みんな、帰っていいぞ」

「お疲れ様でしたー」

ラボに残った13号機。充電器の中へ寝かされる。

「さあ、13号、悪者はおじさん達が退治したからな」

「助かります、森沢さん！」

「じゃあ、ハッチを閉める。おやすみ！ ご苦労！」

「はい☆ おやすみなさい☆」

バタム……。

「ふー。やれやれ……。さてと、東京人材バンクはまだ開いてるかな？ 帰りにでもついでに寄って行こうかな……」

森沢靖彦、四十一歳。中間管理職の苦悩の日々は続く……。

君とだけドーナッツ！

ここは、いつもの水口家。今日は日曜日。パジャマ姿の水口祐介は、ごっしゅごっしゅと歯を磨いていた。それが済むと顔を洗い、食卓へと向かった。野菜サラダに、ショルダーベーコンとサニーサイドアップの目玉焼き。そしてバターロール。さて、食うか、と思った刹那、傍らに置いてあった祐介の携帯電話が震えた。発信元は「非通知」となっている。ああ、またか。いぶかしげに、水口は携帯に出る。

「はい、水口ですが」

『もしもし、ミズグチ？ あたしー』

「あの、失礼ですが、どなたですか？」

『わっかんねーのかよ！ あたしだ、佐倉朋美！』

「な、なーんだ、脅かすなよ」

『脅かしてねーべさ！』

「で、何の用？」

『ミズグチ、いま、ヒマ？』

「ヒマじゃねえけど、予定もない」

『どっちなんだよー』

「だから、何が言いてえんだよー」

『つーかさあ、朝から晩まで一、バーチャルな体験をしている君が可愛そうでー』

「はあ？」

『じゃあ駅前のドーナッツ屋さんとかに行くから、駅の改札口で十時ね、わかった？』

「はいはい、お供いたします」

『よろしくー、じゃねー、ガチャ！』

「突然切りやがった……子供かあいつは！」

午前九時半。京葉線、海浜幕張駅に、東京から来た如月弥生が降り立った。

「えーっと、祐介の電話番号は……ふふ、きっと、びっくりするぞぉー」

如月弥生は、小指と人差し指と親指を立てて、脳内のダイアルをプッシュした。この子には、携帯電話の機能も備わっているのだった。その頃、水口家では、また祐介が携帯電話を取った。発信元は「如月弥生」となっていた。

「はい、水口ですが……」

『おはようございます、如月弥生ですけどー』

「や、弥生ちゃん？」

『うん！』

「今日は、どうしたの……」

『いまね、海浜幕張の駅まで来てるんだけど、迎えに来てくれないかなって』

「うあちゃー」

『どうしたの？』

「いや、午前十時に佐……いや、その一、午前十時には行けるかなって。支度とかあるし……じゃあ改札出たところで待ってるからね」

『うん、わかった。きっとだよ！　じゃあねー』

「まずいよこれは……オレに残された選択肢は、ひとつめ。佐倉とダブルデートをかます。ふたつめ。どっちも断る……なら最初からそうしろよ！　今からじゃ、もう連絡とれないし……。みつつめ。佐倉を放って弥生ちゃんと……後が怖い。できるわけねえよなあ。よつつめ。弥生ちゃんを断る……って、もうオッケーしちゃったし、東京からわざわざ来てくれているから……おお、ああああー」

「祐介、朝からうるさい！」

「あう！　姉貴……なにも枕投げつけなくても……」

「なに、熊みたいに、ノシノシ歩きながら、雄叫んでんのよー、まったくもう……」

水口祐介は困惑していた。彼にしてみれば、朋美も弥生も断りづらいのだ。かといって、オフの日に同席させたことがないから内心アンドロイドを良く思っていない朋美がどんな反応をするのかそれも不安なのだ。

「携帯に電話かけようか……弥生ちゃんも来るって。でも、そうしたら、あんたいつもいつもアンドロイドばかりって、イヤな顔されるだろうな。直前まで黙ってようか。きっと、そのうち解ることだし……よし、決めた！」

京葉線、海浜幕張駅午前九時五十分。

、

如月弥生は、自販機の影ですでに待っていた。機械だから当然だが、時間厳守以上のなにものでもないベージュのスカートに白のブラウス、実に地味目な格好だった。

（あ、あれは、同級生の人がこっちに来るですよ。佐倉朋美ちゃんですよ。一体こんなところへ何をしに来たですか。そんな情報聞いてないですよ。影に隠れて見るですよ。わうー）

佐倉朋美が改札口の前へ立った。白いワンピースだ。赤い時計バンドが妙に腕で目立つ。左の手首を外に返して、時計をしきりに気にしていた。あれでいて、結構時間には細かい性格のようだ。

（どこへ行くですか。まさか祐介と一緒に約束ですか。でも祐介は最初に約束してたから、わたしの方へ来るはずですよ。じゃあ関係ないじゃないですか。心配することないですよ）

水口祐介が、時間通りに来るはずがないことは、クラスメイトの一致した意見である。彼は「ミズグチ時間」で動いているので、女の子を待たせるという最低なことでも笑って許されてしまう。ああ、あいつは「ミズグチ時間だからね」と、こうだ。仲間内では珍しくもない。

（あ、電話を取り出したですよ。どこへかけているですか）

「もしもしー、佐倉だけどー、まだー？」

『えー、いまGパンはいたとこ』

「早く来ないと、タダじゃおかないわよー」

『はいはいー、いまファスナー閉めた』

「ったく……」

（怒っているですよー、誰にかけたんですかー、それってとっても気になるなあー、ところで祐介くんはいつ来るんですかー）

京葉線、海浜幕張駅 午前十時ちょっと過ぎ。

（あーあ、朋美ちゃん、駅の壁を蹴り始めてるですよー。とってもおかないですよー。誰ですか怒らせるのはー。祐介くんはまだですかー）

白いサンダルが、掲示板の横の白い柱を黙々と蹴り始めた。時間厳守の佐倉にとって、五分前に来ないってだけでも、もう激怒モノらしいのだ。

京葉線、海浜幕張駅 午前十時十分。

白いTシャツにGパンという、極めて質素な服装で、水口祐介が現れた。頭をかきながら、栗毛色のワンレングスの髪の毛を揺らして……。

「お、おはよ……」

バキッ！

「うごッ！」

「遅いッ！」

佐倉朋美のアップercutが、水口祐介のアゴにヒットした。

「い、痛ってえ……」

「ふんだ」

「何で？ ぜって一早いじゃんかー。あの距離を走って来てさー」

（わああ、あのスタイルで並んでいたら、本物のカップルみたいですよー。あたしの入る隙なんてなくなってしまいますー、お似合い……ですか……ちょっと……つらいけど……）

「あれー？ おおーい！ 弥生ちゃああああんー！」

「なあに？ 彼女も待ち合わせ？」

「弥生ちゃああああん……って、何だよその不機嫌な顔は……」

「あんたも好い加減、アンドロイド離れしなさいよね！ 何さ、あんなバーチャルなもん」

（ガーン！ わたし、ただのバーチャルなもんですか！ わたしバーチャルじゃないですよ……。わたしはここにいるですよー。でも、出ていく勇気がなくて……コソコソ……）

「待ち合わせしてたんだけどなー、一緒に行けるといいんだけど……」

「いないアンドロイドどうやって連れてくの！ さあ、夢みたいなこと言っていないで早く！」

「おお、痛てえ、耳引っ張んな！ オレにはまだ弥生ちゃんとの約束が……」

「いいから、しのごの言わずに、とっとと来る！」

「わ、痛たたー」

（あ、どこか行くですよ！ わたしを置いて行っちゃイヤですよ！ でもこのまま黙って尾行してみようかなって気にはなります。一体、ふたりしてどこへ行って、何を始めるんでしょう！）

如月弥生は、自販機の影で青い瞳を見開き、ペDESTリアンデッキの向こうへ歩いてゆく二人連れに向かって、電子網膜をこらして見ていた。

（何で気づかれないように隠れてなくちゃいけないのか、わたしにもよくわからないけど、とにかくこっそり祐介たちを追いかけるですよ！）

「これ、くださいっ」

「はい百三十円ね」

如月弥生は、デイリージャパンという英字新聞を、駅のキオスクで買った。ここで、なぜ英字新聞かは別にして、ベージュ色のスカートの少女にとって、非常に不釣り合いな英字新聞ではある。顔をかくしながら五十メートルばかり後方を、しずしずとついてゆく如月弥生！ それで尾行しているつもりなのか！ 英字新聞で顔を隠す少女。ううむ謎だ……。

（はうー、今は円ドルレートがとっても高いですか前日比三十円も高いんですか……って、そんなこと今はどうでもいいですよー一体きみたちどこまで歩くですか……はッ！ 振り向いた

ですー)

「あれ、誰かつけ狙ってねえか？ オレたちのこと……」

「何言ってるの？ 休みボケじゃないのあんた。それとも、被害妄想？」

「いや、でも、しかし、確かにいま、後ろに気配を感じて……」

「ブツブツ言っていないで、とっとと歩くッ！」

「ってもさあ、ちょっとおい、待てよ！」

そこはボウリング場とゲームなどのアミューズメント施設とファーストフードとが一体になった複合ビルだった。一階に並ぶファーストフードの店舗群は、海浜幕張近辺でもなかなか無い建物だった。

「うわ、すげえ、海浜幕張にこんなビルあったんだー」

「あんた住人のくせに、何にも知らないのね」

「うん、知らねー。興味ネエもん」

「今日はアタシと青春する！ いいこと！ まずはドーナッツ屋さんから攻めるッ！ ここのフレンチクルーラ、すっげー美味しいの！」

「そういうもんかな、オレ、甘いモノってどーも苦手で……」

「ぐずぐず言っていないで、さあ早くッ！」

「おっと、袖引っ張るな、危ねえ危ねえ！」

（あわわー、ドーナッツですかーあたし食べられないから悔しいですよー。また引っ張られて入ってゆくですかー。祐介、彼女のお尻に敷かれていて、弥生、とっても情けないですー。あたしも店に入るですかー。何頼むですよー。ブラックのアイスコーヒーなら、何とか平気かも知れません。シュガーは身体によくないですからー）

「いらっしゃいませ！ こちらでお召し上がりですか？」

「そう、抹茶シェイクと一、ハニーディップと一、それから……」

（うわああんなに買うですか！ あんなにお腹に入るですか！ 人間の、そんなところが、ちょっとだけ信じられませーん！）

「はい、祐介、ほらほら、口のまわりに、こんなにチョコ付けて！」

「……あ、悪い」

（わうー、ナプキンで口許をぬぐってあげてるですよー！ あんなにくっついてー！ きゃー、祐介ひどおおい！ まるでカップルみたいですよー！ あとでお仕置きですよー！）

「お客様、ご注文まだでしたよね！」

「ひゃ！ は、はい……あ、あの一、アイスコーヒーをひとつ……ブラックで」

「かしこまりましたー、アイスワンですよー」

「アイスワン、ありがとうございますまああす」

（えー、日本の外務大臣が、アメリカの国防相と会談したですか……って場合じゃないですよー。祐介と彼女が問題なんですー）

如月弥生は、数席離れた窓際が目立たない場所から、祐介たちを観察することにした。もちろん件の英字新聞はそのままで……

（って、今は記事どこ……）

祐介は無理矢理ドーナッツを口に突っ込まれていた。傍目にはたいへん微笑ましい光景ではあるけれど、白昼堂々いいのか君たちは！

（……わー、もう、あんなに近くに座って祐介、まんざらでもなさそうです……なんか、汗かいて困りながらもどことなくうれしそうですよ！　なんでうれしいですか！　ああ、これはもう、これがじぇらしーってものなんですか？わた……わたし……）

英字新聞の端をわなわなさせながらも、如月弥生はじっと耐えていた。が、しかし……

（ああもう、指先で祐介の口許をぬぐうですか！　ああそれからそれから！　朋美ちゃん、その生クリーム自分でなめちゃうですかあ！　君たち一体どんな関係ですかあ！　幼なじみとはいえわたしはもう許さないですよー！　それからそれから、えっと、あの、肩をくっつけて、それから……）

如月弥生の場合、いわゆる乙女回路にあたるのが、演算素子のラティスだけど、もうラティスは半分暴走しかかかっていて、半ベソをかきながら椅子の向こう側で成り行きを眺めていたがやがて耐えきれなくなって……。

「はううううー」

バサバサッ！　カチャーン！　パリーン！

誰にでも聞こえるような、うらめしそうな奇声を発したかと思うと、机の上で、その場にだらりと突っ伏した。一方、保護者気取りで水口にまとわりついてた佐倉が、はっとして、音の方向を向いたままフリーズしていた。

「おい、あの子、耳から煙吹いてるううう？」

「お、お客さん？」

「あれ、水口、あそこに！」

「や、弥生ちゃん！」

「やだ、あんた居たのおおお？」

「ふみゅうううー」

「弥生ちゃん！」

「あわうううー」

「ああ、済みません、知り合いなんです……割ったお皿は弁償しますから……」

「あああああー」

「わかった、わかったから、もう泣かない！」

「わううううー、朋美ちゃんの、ばか、ばか、ばかあああ」

「あ、痛ッ、痛い。わかった、ごめんごめええん……」

「はいはい」

ドーナッツ屋さんには主に水口が平謝りでようやくその場を切り抜けた。近所の公園に出た三人。弥生を休ませるつもりらしい。

「ぷ、ぷしゅー」

「ぷしゅーって……よっぽどだったのねー」

「お前が紛らわしい態度取るからだろー、恋人氣取りで！」

「あんたが優柔不断だからこうなるのよ！ 機械であろうと、女を泣かすんじゃない！」

「って、何でオレが！」

「……ふみゅーん」

「あ、寝てる……」

水口祐介の独白

ある朝、僕がからっぽになってゆくのに気づいた。君なしでは何も手につかなくて……君はどうしていますか。君はどちらを向いて何を考えていますか。誰が、好きですか……。

僕はラティスという演算素子を積んだ少女型のアンドロイドを好きになってしまった。正確に言えば、最初に好きになったのが、人間ではなく、アンドロイドだったってことになる。

彼女はといえば、土日には見本市や取材に大忙しだ。無理もない。国産初のアンドロイドだもの、誰も放ってはおかないだろう。なにせ機械が、自分の意志で口を利くんだから。

僕は君を好きになりました。いや、本音では愛しています。彼女の……どこに？ 理由なんかあるもんか。好きに理由なんか……でも、この先僕たちはどうなるんだろう。

明日は何をして彼女に近づこう……好奇と目覚め。そんな何かが心の中を錯綜して、いてもたってもいられなくなる……僕はまだ、彼女を抱いたことがない。

僕はまだ、彼女と手を握ったことすらない。あんなに近くにいて、あんなに遊んで、一緒にいて、僕はいったい何をやってたんだろう。

日が暮れて、朝が来ると、400回近くそれを繰り返すと1年なんてあっという間に流れ去ってゆくだろう。如月弥生、その存在全部をつなぎとめておきたい……。

モニター上の彼女は、それはそれなりにいいんだけど、彼女のコピーに過ぎない。それよりも何よりも会って話がしたい。立体の彼女を見たい。触れたい……。

たとえば何億も払って弥生ちゃんを買うとする。それで彼女は僕のものになるのだろうか。それだけでは何か違う気がする。金を払えば買えるようなものでは、たぶん、ない。

機械を好きになってしまった。それでいいと思う。機械を好きになってしまった。それはそれで仕方のないことかも知れない。軽金属と、電子部品のかたまりだったとしても……。

如月製作所のスポットCMで、彼女が一瞬だけ微笑んでいる。コスチュームを着て、あいさつをしている。たった30秒だけど、何か他人に弥生ちゃんを獲られた気がする。横取りされたような、イヤな気持ちになる……。

最低だ。僕はまだ何もやっちゃいない。僕はまだ彼女を楽しませたことも、彼女と楽しんだこ

ともない。大切なのはそういった思い出……素晴らしい記憶のかずかず……。

康夫さんが言っていた。ラティスは積みすぎると崩れてしまうんだって。思い出の蓄積も、彼女には命取りだってそう脅かされている。ラティスはまだ未完成で、思い出を詰め込みすぎると、メモリ・バーストになるんだって。

かまうものかと、彼女さえ言ってくれば……公衆の小道具で終わるような彼女じゃないはずだし、お人形でもない。れっきとした人格……に限りなく近い記憶素子があるんだ。そして、リアルな発声器官でしゃべるんだ。

その声で、僕が好きですと、まだ聞いていない……その姿になってから、あまりに忙しく、まだ僕を求めてきてはくれない……私は自分の意志で、人間とつきあうことができる、世界で初めての機械ですと言っていた。それを信じたい。

彼女にとって、僕は何だろう……人間社会での初めての友達……ネットでチャットした、ただのお客さんか……それを確認しなければ……一刻も早く……。

なぜだろう……彼女の手紙、彼女の写真、彼女のデスクトップ画面……ここには本人以外の何だって揃っているのに、物足りないのはなぜだろう……。

姉も母もわかってくれない……ただの病気だという目で僕を見てる……寝ても覚めても如月弥生だという僕に、なぜか身内は冷たい……。

からくり人形以上のものをそこに感じ、電子部品にはあり得ないぬくもりがあって、マネキン人形より自分に近く、機械と呼ぶにはあまりに敏感で繊細すぎる……温かい心と、繊細な指先で僕をどうにでもしてくれという気持ちにさせる……心が、乱れる……。

アンドロイドと寝るような関係になれば、僕は異常者なんだろうか。機械とセックスするような人間は、やっぱり異常者なんだろうか。一番セックスしたいのは機械です、今すぐに、あの機械の中に入れていたんですっていうのは、やっぱり異常なんだろうか。

口づけをしたいのはあの機械です……製作所13号機です……あの機械離れした人間に僕は日常生活の何もかもを掻き乱されて、もう夢中で今すぐにでもイッちゃいそうですって……。

……これは異常なんだろうか。こういう悩みって世界初なんだろうか。小さい頃に女の子と遊んだ時のような、何か素朴な懐かしさを感じる……彼女が生まれ変わりだからだろうか……昭和六十二年に死んだはずの如月弥生のレプリカだから、なんだろうか……。

たとえ大変な群衆の中で冷ややかな視線で誰もが僕を見ている、その中できっと叫べるだろう！ 僕を指さして誰もが馬鹿扱いしたって叫んでやる！

「如月弥生が好きだ！ 如月弥生が大好きだ！」と……。

たとえ何万人が僕を軽蔑したって構わない。世界中が僕を変人扱いしたって構わない……たとえ世界を敵に回しても、弥生ちゃんと会いたい……すぐに会いたい……どうしよう……。

「もしもし、弥生ちゃん？ 水口だけど……そう、祐介……元気だった？」

人員規模、約八千名の株式会社如月製作所。馬込工場の連中はおろか、本社のごく一部の人間にしか知らない、もう一つのアンドロイド計画があった。如月康夫の弟で経理部長の如月敦史を中心に、極秘裏に進められて来た「紫苑プロジェクト」は、知能を持ち、ショービズに特化したアイドル向け専用アンドロイドとして「如月紫苑」を作り、世に知らしめようとするチームが結成されていた。

ラボがある場所は近畿。京都府長岡京市にある、如月製作所神足（こうたり）工場。自動車の製造ライン用のスポット溶接機械など、ファクトリーオートメーションの総本山ともいべき部署の、ごく一角。神足工場F A事業本部パーソナルコミュニケーションデバイス事業部第七設計課、（通称）紫苑プロジェクトというのがそれだ。

如月康夫のラボ。東京都大田区にある、馬込工場技術研究開発本部技術部設計課分室が、国産初、恋をする機械の試作に成功した。これに遅れること2ヶ月。試作13号機、如月弥生を司るプロセッサが5進数コンピュータ、ラティスプロセッサ、プログラム言語RASCALという複雑な物に対して、如月紫苑を司るプロセッサは、通常の2進数コンピュータ。だがしかし、超高速演算ができるスパコン並みの知能を誇るものだった。ITエンジニアだったら、一度は誰でもかじったことのある、Objective-C言語（構造化C言語）で動く優れもの。つまり、現在のスマートフォンと同じような理屈だ。

如月弥生は、きっかけを自分から探して命令を実行するが、回路は複雑になる。如月紫苑はきっかけに対して命令を実行するイベントドリブン方式のアンドロイドだった。なので、回路はシンプルになるし、通常のコンピュータとの間に特別な変換装置を持たなくても済むところ。ここが大きな違いだ。さて、如月康夫のラボに挑戦状を叩き付けた神足工場。そのチームとは。

J R 京都線、長岡京駅から、如月製作所神足工場行き専用バスが出ている。朝のラッシュ時も一段落した頃。この時間にしては珍しく、工場から技術者数名と、高校の制服姿の少女、如月紫苑が、駅前の降車専用バス停に降り立った。引率するプロジェクトリーダーの名前は、高柳隆一。秘書の名前は宮辺愛子。伶俐なプログラマの名前は加茂慶一郎。豪放磊落な回路担当は石動重道。機構設計を与る松沢乙彦。筐体設計を与るのが渡辺美千香。総勢6名と1台の東京出張になる。

駅頭で、リーダーの高柳隆一が、拳を振り上げながら、やおらスタッフ全員に、シュプレヒコールを浴びせた。

「いいか諸君！ 今こそ、京都神足工場の技術の粋を、馬込のバカ共に見せつける時が来た！

いざ、上京する！ のぞみ１４号東京行き！ 行くぞ皆の者！」

「おーっ！」

秘書の宮辺が黙って傍らで黙ってうなずく。加茂と松沢の眼鏡が光る。筋骨隆々な石動が、ガッツポーズを決める。渡辺が、紫苑の傍らに付いて、紫苑のカーディガンを脱がせて、いま受け取ったところ。何でしょう。余りにも普通の会社員すぎて、気持ち悪いですね！

「京都着１１時５分。お茶やお弁当を買って、のぞみ１４号が１１時１６分発。品川で下車して、山手線外回り、渋谷新宿方面で五反田まで。そこから都営地下鉄浅草線で終点西馬込まで……楽勝よね。道に迷う心配もなさそう」秘書の宮辺女史と、筐体設計の渡辺女史が、乗換案内アプリを眺めている。

如月紫苑ご一行、馬込工場到着 14時！

如月紫苑たちが向かった先は、穏やかな馬込工場設計課分室。高橋聡子が提案した。

「お茶にしましょうね！」

分室の一同が応える。

「わーい！ お茶の時間だ、お茶の時間だー！」

「すまん高橋、オレは腹が減ってだなあ……」

「じゃあ、森沢さん、チーズケーキもあげましょう。お昼抜きだったものね」

「ああ、サンキュー」

「高橋さん、オレらは？」

「ああ、耕平くんたちには、チョコレートビスケットがあるわよー」

「わー！」

「あの一、わたしには？」

「弥生ちゃんには、糖分なしのプレーンなお紅茶にしましょう！ ダージリンよ」

「高橋さん、これって高級茶葉ですよ！ 素敵！」

ほんわかでいて、かつ怜悧（きりっとした天然さん）な高橋聡子は、建物内に響く多数の足音を聞き逃さずにいた。「しーっ！ みんな静かに！ 敵襲！」

「えー？」「どんな敵なんだよ」「って、ガチャ……？」

馬込工場が誇る自律制御型アンドロイド、如月弥生が、京都神足工場が誇る汎用ショービジネスアンドロイド、如月紫苑に出会ったまさにその瞬間であった。

高柳隆一。如月康夫のおかげで辛酸をなめさせられてきた、不遇な男である。「紫苑、皆さんに、そして、如月弥生さんにご挨拶を」

「私は一、金閣寺より輝きたい、京都神足工場製アンドロイド、如月紫苑です。どうぞお見知りおきを。如月弥生さん？」

「ほえ？ わたし？」

「あなたとわたしは、異母姉妹（きょうだい）みたいなものだから、よろしく……ねっ！」

握手と共に、如月弥生と繋いだ手からは、高圧の電撃が、如月紫苑から放たれた。がしかし、故障するはおろか、如月弥生は動じることなく、その電撃を逐一手の爪先から吸い取り、自分のエネルギーにしていた。

「紫苑ちゃん、電撃足りないよ。こんなんじゃお腹膨れない……」

「ぜいっ、ぜいっ、すー、は一。すー、は一。ふー、ふー。何よ、この化け物。他人の電撃喰らってそれを栄養分にするとは！」

トイレから、如月康夫が帰ってきた。ハンカチを手にしている。
「よー、高柳。京都の空気はうまいか？ 今日は何の用だ？」

ふらふらになった紫苑を一時座らせて、高柳が如月康夫の前に立った。
「やあ、如月康夫……今から宣戦布告するために、こちらのラボへ寄らせてもらったぜ……」
「お前、宣戦布告って、弥生ちゃんに何を……？」
「ショービジネス向けアンドロイド、如月紫苑と真っ向勝負し、どちらが次のアルバムの売り上げが良いか、競争するのさ……コンフィデンスの売り上げチャートでな。シングル初動売り上げ五〇万枚を先に突破した方が勝ち、どうする、如月康夫？」

如月康夫は、高橋聡子と森沢靖彦に向かってひそひそ話を始めた。そして。
「よし高柳、受けて立とう。弥生ちゃん！ この紫苑とかいう歌姫を歌で負かせて、お前は勝利をつかむのだー！ いいな！」
「分かった如月、明日から4週が勝負だ！ 紫苑ちゃん、このミーハーな弥生とかいうアイドルを実力で負かせて、勝利するのだ！ 分かったか！」
「ぬわはっはっは！ 高柳！ 泣きを見るのはお前だ！ 首都圏における弥生ちゃんの知名度、なかなかのものだぞ！」
「そうはいくか如月！ 吠え面かくのはお前の方だ！ 既にテレアポ部隊が、有線放送に電話をかけ始めているぞ！」

訳の解らない言い争いはしばらく続き、当事者たちは……。

「ねえ、弥生ちゃん、うちの上司がごめんねー、とっても執念深いの！」
「ほえー、紫苑ちゃん、康夫さんも前に出たら引かないところあるよー！」
「お互いに大変ね……ともかく、上司の命令、歌で勝負しましょ！」
「むむむ、負けませんよわたしは……康夫さんのアンドロイドだもの！」

なんだかこちらでも違う形の友情が芽生えていたりして……。

「とりあえず如月、電気貸せ、そしてくれ。紫苑を充電しなければ……」
「バカな。お前に貸す電気はない。蛸殻町の経理部の弟のところへ行くんだな」
「まあ、いい。習志野学園女子高等学校に、充電器を預けてある。蛸殻町にも預けてある」
「来るな。顔も見たくない」
「まあ、そう言うな。我々はケンカをしに来たんじゃない。技術力を比べようと言うのだ」
「……」
「じゃあな、如月。行くぞみんな！」

高柳隆一をトップに、ズラズラと一行が蛸殻町本社へと帰って行く。

製作所13号機 (1) -The factory thirteenth-

<http://p.booklog.jp/book/1796>

著者：田所稻造

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/inazotaddy/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/1796>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社